

「青少年育成施設と利用者の中間支援. その模擬的組織化および検証」

社会学部 立木研究室 プロジェクト・イマジン班

7164 岡田 晋爾, 8004 大西 浩司

8052 山田 千寛, 8084 山口 郁

8402 森山 靖士

目次

1. はじめに
 - 1-1. はじめに（問題意識から問題提起へ）
 - 1-2. コミュニティ、その現状（事例①）
 - 1-3. 偏差値神話（事例②）
 - 1-4. コモンズ・熱中心の必要性（事例①②からの問題の具体化、具体的な問題提起へ）
 - 1-5. 「コミュニケーション・ツール」としてのイベント
（イベントの特徴・有効性、問題の解決策）
 - 1-6. 「地域イベント」の現状と問題点
 - 1-7. 地域イベントに対する中間支援

2. 仮説

パートⅠ A 「アクション・リサーチ」

3. 音楽という手段（プロジェクト・イマジンの始まり）
4. 活動記録 『PI活動日記』
5. 集計・分析
6. 考察・評価

パートⅡ B. 「イベントによる青少年の意識変化」

- i. リッカート法による社会調査
 - ii. 集計・分析
 - iii. 考察・評価
7. まとめ（パートⅠ・パートⅡから）
 8. 参考文献
 9. 資料 企画書・イベント関連資料

1. はじめに

1-1. 問題意識から問題提起へ

近頃、地域の活性化という言葉をよく耳にするようになった。メディアにその言葉が現れない日はなく、近年最も注目を浴びていることのひとつだと言えるのではないか。ところで、地域の活性化と一言で言っても、その内容にはさまざまな要素を含んでいる。地域の活性化について、池田秀男（1992）は次のように述べている。

「地域に生気が呼びさまされ、地域の諸活動が個人レベルでも集団や組織のレベルでも活発になってくること」

つまり市民一人一人が、殺伐とした都会の中で人間関係が薄く、自己を見失いながら生きるのではなく、一人一人が地域で何らかの役割を果たしている、大切にされていると実感すること、いわば生きがいを持つとともにそれぞれの目標を持ち、自らの分野で活発に活動しているということなのである。

社会を見渡したとき、果たしてどれほどの地域がこのような状況にあるといえるだろうか。どれだけの人間がこのような状況で生きているといえるだろうか。地域は荒廃し、人々は希望と活力を失い、物事に対する熱意を忘れてしまっているのではないだろうか。私たちはこのような社会に陥った原因を解明し、何らかの形で解決策を模索することにした。そこで私たちは地域活性化の重要なポイントを「帰属意識」「交流」「協働」「やりがい」の4つに概念分けし、それらのキーワードをもとに「活性化」の糸口を見つけることにした。

1-2. コミュニティ、その現状（事例①）

「コミュニティ」とは、一定の地域的な広がりとし、そこに居住する人々の帰属意識によって特徴づけられる社会のことをいう。本論文では一貫して距離的な地域、帰属意識により結びついているとされる近隣住人の地域社会の両方をコミュニティと称して扱うこととする。

さて昨今、コミュニティの活力低下という言葉が叫ばれているが、果たしてその実情はどうなのであるか。その一例として、震災から5年を迎えた神戸市では、復興問題に加え、新たな問題に直面しつつある。それは、震災という共通項によって支えられてきた、市民レベルでの「協働」・「自律と連携」・「地域に対する愛着」意識の風化である。これらの意識の風化がコミュニティの活力低下と呼ばれるもののなのである。

また、地方の過疎化、中央の過密化によるコミュニティの崩壊も、深刻な問題の一つとして取り上げられている。多くの過疎地では、人口の流出、高齢化の進行、若者の減少により、コミュニティそのものの存続の危機に陥っている。また、一部の都市の人口過密地で発生している職住分離や人間関係の希薄化は、人々の市民意識の低下、アイデンティティの喪失、無気力化という現象を出現させるにいたっている。このように、過疎化が直面している危機や、都市部で発生している現象、中でも市民意識の低下、言い換えるならば「地域に対する愛着」意識の貧困化はコミュニティの活力低下の顕著な一例と言える。

1-3. 偏差値神話（事例②）

偏差値至上主義の教育を受けた人々が、我が子に外見だけの教育を行ってきたことが問題とされている。例えば、学習やおけいこ事に力を入れるような学力重視の教育を行う中で、大人の指示に支配され、自分の判断で行動することができなくなり、それが若者の四無主義「無気力・無関心・無責任・無感動」などを引き起こしている。

1-4. コモンズ・熱中することの必要性（事例①②からの問題の具体化、具体的な問題提起へ）

これらの2つの事例から、次のようなことが言える。

まず事例①から、人間関係の希薄化や、協働・地域への愛着の低下は、神戸市においては震災からの時間の経過で顕わになった、「コモンズ」の喪失から引き起こされたコミュニティの活力低下と言える。

ここでいう「コモンズ」とは、他人との時間と空間の共有によって、「我がごと」と思える場所や経験を持つということである。

つまり、新たにコミュニティづくりをするためには、新たな「コモンズ」の発見が必要なのである。

次に事例②から、学力重視の教育現場で見られる子供たちの「無気力・無関心・無責任・無感動」は、彼らが学力という価値の単一化に閉じ込められたために起こっている。一方、社会では価値のグローバル化、多様化がますます進んでいる。この変化する社会と学力重視の教育現場の間で板ばさみになっている子供たちは、自分の本当にしたいことを見つけることが出来なくなり、物事に熱中することや興味をもつことが困難になる。例えば、音楽や、運動など、勉強以外のことに目が向かなくなるということである。つまり、学力以外のことへの視野の拡大が教育現場において、最重要項目として挙げられているが、それはこの失われつつある「熱中すること」や「興味をもつこと」を引き出すということなのである。

1-5. 「コミュニケーション・ツール」としてのイベント（イベントの特徴・有効性、問題の解決策）

今、わが国は、GNP や企業収益では世界トップレベルの豊かさを享受している。しかしそこに住み、働き、祈る場所としての地域は衰退や荒廃に悩まされ、必ずしも人々が「生活の質」を享受できる状況には置かれていない。そこで地域活性化や再生に向けて、新たなアプローチ方法として「イベント」が近年注目されている。

そもそもイベントとは、「人・物・情報の集積の場を積極的に創設する」という特徴を持つ。他に「その企画実施者にとっても、利用者にとっても共通の直接的な体験や人と人の直接的な接触・コミュニケーションの機会となる」という特徴も持つ。これらのことからイベントは「コミュニケーション・ツール」および「コミュニケーション・メディア」とであると言われている。つまり、コミュニケーション・ツールとしてのイベントは直接の参加者への影響（第一段階の流れ）だけでなく、彼らの体験に基づく非参加者へのコミュニケーションを拡大する可能性（第二段階の流れ）を含んでいる。こういったイベントの諸機能や特徴は、技術開発・新しい商品や文化の普及以外に、地域活性化の方策として地域でも導入されている。地域で行われる際のその主要な施策は、①イベントの開発 ②地域間交流 ③人材育成 などである。これらの施策は相互依存的関連性があり、人々に時間と空間の共有を可能にし、ここにコモンズを創出している。つまりコミュニティが形成されるのである。このコミュニティ形成能力を有するイベントを「地域イベント」として活用することで、今必要となっている「コモンズ」を生み出し、同時に「熱中すること」や「興味をもつこと」を引き出していくことが可能なのである。

1-6. 「地域イベント」の現状と問題点

「地域イベント」とは、ある地域においてその住民を主たる対象として行われるイベントのことである。

イベントには、場所・人・資金が必要である。地域イベントにおいても同様にそれらが必要であり、その地域イベントを企画し仕掛けるのは、金・情報・権力を持つ行政が圧倒的に多い。しかし、それによって、地域イベントそのものが、行政主導、主体にならざるをえず、住民参加とは名のみで、行政の使い走り、下請け的な状態に陥るケースがある。それによって本来のイベントの有効性というものを十分に発揮できず、その発展を大きく阻害している。

なお、本論文では住民参加の形を次の2つに分けて扱うこととする。

- ① 参画とはイベントを能動的に企画・運営することを意味する（本論文で出演者は参画者に相当する）
- ② 参加とは参画も含めたすべての参加を意味する（イベント関係者全員）

1-7. 地域イベントに対する中間支援

従来の地域イベントでは、行政がイベント屋と呼ばれる一部の人と組して行われてきた。しかし、それでは 1-5 で述べたようなイベントそのものの特徴や有効性は失われてしまう。これを回避するためには、やはり行政だけがイベントを企画・運営するのではなく、多くの住民の参画を促進していかなければならない。そうすることでこそ地域イベントはそのイベントの特徴や有効性を発揮し、地域のコミュニティづくりに一役買うと言えるのである。

では、従来型、つまり行政主導の地域イベントにならないようにするためには、どのようなイベントづくりを行うべきなのであろうか。住民の参画を、よりスムーズな形で行うにはどのようにすれば良いのか。その答えは、中間支援にあると考えられる。地域イベントとして理想的な形になるように、住民参画者の声と、資金面での主催者である行政の声を反映させる 2 者間のつなぎ役、中間支援者の存在によってこの問題は解決させられるのである。

2. 仮説

コミュニティの活力低下や偏差値教育から、「コモンズ」や「熱中すること」の必要性へと問題を提起し、それらに対しイベントの特徴と有効性を挙げた。そして地域イベントから中間支援者にまで話を進めた。これらすべてのことを踏まえた上で、私たちは次の2つの仮説をうち立てるにいたった。

a. 「行政と参画者の中間支援者の存在によって、本来の住民参画型イベントの有効性を保つことができる。」

b. 「住民参画型の地域イベントによって、イベント参画者の意識が変わる。」

a. 本来のイベントの特徴や有効性とは 1-5. で述べた通りである。それらを地域イベントに活かすための最たる手段として、中間支援というものの存在が行政とイベント参画者の間には必要であると考え、そうすることで地域イベントはイベントの持つコミュニケーション・ツールとしての役割を果たし、コミュニティの活性化につながるのである。

b. 住民参画型イベントは以下のような成果が期待される。まず、新たな「コモンズ」を創出すること。学力以外のことへ視野の拡大を図ること。つまり住民参画型イベントによって住民参画者の意識に変化が起こることである。ここで言う「住民の意識」とは最初で述べた「帰属意識」「交流」「協働」「やりがい」と一致する。

先に述べた a. の仮説を検証するために、私たちは実験的に中間支援者として地域イベントを開催し、その一連の流れをアクション・リサーチとして（パートⅠ）にまとめた。

また b. の仮説を実際に検証する機会としてこのイベント前後で住民の意識を測る社会調査を行い、（パートⅡ）でまとめた。

パートI A. 「アクション・リサーチ」

3. 音楽という手段（プロジェクト・イマジンの始まり）

4つの問題意識から始まり、イベント・中間支援という段階から2つの仮説へと論点は進んだ。卒業論文として始まった私たちの活動は、「プロジェクト・イマジン(PI)」と銘うち、実際に地域イベントを組むという方向へと向かった。そして、私たち自身が、やりがい・生きがいを感じている「音楽」の素晴らしさを人々に知って欲しいと願い、これをイベントの趣旨とした。

時を同じくして、神戸市では、「青少年の居場所づくり」という施策を行っていた。この「青少年の居場所づくり」とは、「青少年は地域社会から育む」という視点に立ち、地域の青少年育成団体を通して、異年齢・異世代交流による地域の文化共有物づくりや、地域の遊び場などとなる共有空間づくりに青少年が参加することを促進するという施策である。

そこで私たち PI は、神戸市が行っていた「青少年の居場所づくり」という施策から、行政とともに青少年対象のイベントを開催することにした。また、この施策内のユースプラザKOBÉ・WEST 事業に基づき、同施設(ユースプラザKOBÉ・WEST, 神戸市須磨区)で活動することを神戸市より推薦して頂いた。この施設には、スタジオ・リハーサル室・ホールが設けられており、イベントの趣旨に基づくライブを行うことにした。

なお、地域イベントの開催に対する私たちの基本的スタンスは上記「a. 行政と参画者の中間支援者の存在によって、本来の住民参画型イベントの有効性を保つことができる。」の仮説に基づき以下のように定めた。

「プロジェクト・イマジンとしての地域イベントへの関わり方」

- 私たち PI は行政および住民参画者の中間支援者である。
- 今回のイベントに対する行政の役割は場所・資金の援助に限定する。
- 基本的なイベントの企画・運営は、参画者である住民と私たち PI が行うこととする。
- ライブ出演者は参画者として扱うこととする。

4. 活動記録 『PI活動日記』

1. 1月第3週・1月25日

2001年1月11日、5人はゼミの教室に集合した。この日の話し合いもまた卒論についてであった。未だ方向性が見えてこない私たちは「神戸市震災復興総括・検証報告書」・「神戸市復興計画推進プログラム～新生 神戸を目指して～」のまわし読みをすることにした。全8冊を5人で1週間以内に読みこなすということに、メンバーは、卒論に求めている、プロジェクトと共通する理念などを見つけられるかもしれないと期待し、また単純に復興計画に興味を湧いた。しかし進むにつれてこの作業の困難さから疲労を覚え、同じことが繰り返される内容につまらないとさえ感じた。中には、その作業に意義を感じられず、ただ読むだけに終わったメンバーもいた。その一方で、この手間のかかる作業を即決断・行動に踏み切ったこの班の卒論への積極性に感心し、頼もしさを覚えることにもなった。

そして一通りに文献を読み終え、キーワードを拾い出し、私たちは企画書作成へと作業を進めた。この企画書とは、1月25日に神戸市市民局青少年課（以下「行政」）へプレゼンテーションをするためのものであった。こうして、初めての企画書作成が始まった。私たちは企画書のフォーマットの文献を探すが見つけれず、皆で改めて理念を考え「目的・手順・要旨」という形で必死に自分たちの思う企画書をつくった（資料-1）。こうして、この企画書は「音楽活動を通じて、熱中することの大切さ、参加することの楽しさを知ってもらう。」という目的を掲げ、私たちの活動が音楽や地域情報提供の機会を担うものであり、「協働」・「つながり」・「共同体」・「地域主体の催し物」の推進を願うものとして作り上げられた。

1月25日の昼、三宮の神戸市役所前に集合した。というのも、この日は神戸市市民局青少年課へのプレゼンテーションの当日であった。このプレゼンテーションとは、卒論を行うにあたっての資金として、神戸市の平成13年度予算に含まれる施策・事業への助成金を請うものであった。そしてこの日の成果は、自分たちのこのプロジェクトへの想いを行政側に伝えたことと、「ユースプラザ KOBE・WEST」（以下「ユープラ」）という青少年育成施設を紹介されたことであった。

この日の午前中に、岡田が清書をギリギリ間に合わせることが出来た。岡田にとってこの企画書は、確かな企画書のフォーマットが分からないだけに、負けたくないと作り上げたものだった。いざプレゼンテーションを始めるにいたって、それまで岡田は自分がしっかりしていれば良いと考えていたが、山田・山口の発言から彼女らに頼ることもできるのだという安堵を覚えた。メンバーは、公的な場で、自分たちの企画書を持参・プレゼンテーションすることに緊張し、目的や、意図を相手に上手く伝えることができるか不安であった。また、幼稚な文章・考え方と判断されたくないと考え、「一生懸命何かに向かうことの素晴らしさを、多くの人に知って欲しい」・「合同発表会をつくり音楽活動を促進したい」・「子供たちの居場所をつくり、音楽の素晴らしさを広げ、市民のつながりをつくっていききたい」ということを、必死で伝えた。しかしプレゼンテーションに対する行政の反応の薄さに歯切れの悪さを感じた。またこの時、大西は全く発表・説明できなかったことに、どうしたものかと反省したのだった。

今回の行政へのプレゼンテーションまでは、自分たちの企画に理念や計画があっても、活動拠点が決まっていなかったのので、PIとしては、行政からユープラを紹介してもらって嬉しさと安堵感を感じた。なぜなら行政が紹介してきたユープラならば、企画への資金の不安は解消されると思ったからだ。つまり援助金が受け易いと思ったのだ。また今回の市役所訪問は、社会とのつながりを幾つかつくることができ、心強いと感じた。一方、私たちはユープラを盛り上げることは、市役所にもメリットがあることなのだと気づいた。なぜなら、そこから行政側との話がどんどん膨らんでいったからだ。しかしその話の展開が急速なために、山田は自分たちが望む方向とズレていくような恐怖を覚えた。ここで山田は、この企画は誰のためでもなく自分たちのものであって行政の言いなりにはならない、とも改めて心に誓ったのだった。そして岡田と大西は、今後の拠点になる施設を紹介されるにいたるあまりにで上がった展開に度肝を抜かれ、出来レースになるのかもしれないという不満と不安を覚えた。この中で、メンバーはこれからへの戸惑いもありつつ、5人でやっていくことを心強く、楽しみに思っていた。しかし、この時、山田は先生が卒論グループの中で、1つぐらい成功した班があればいいといった言葉に不満を感じていた。この日、

この後、市役所を離れた足で、メンバーを代表した数人がユープラを訪ねた。山口は活動拠点が決定するかもしれないと心浮かれていた。この時山田は同行しなかったので、山口から状況を聞き、卒論の拠点がここに決定するかもしれないと思った反面、少し遠いと感じた。

2月8日、この日はミーティングを行った。そして阪神淡路大震災からの神戸市の復興に関して、2次的（物質面ではなく精神面の）復興へと議題が進んだ。そこでは、イベントに募金を取り入れるという意見も出たが、趣旨が異なるという点で辞する方向へと落ち着いた。

2月18日、再度全員でユープラをアポイントなしで訪ねる。私たちは、その日初めてユープラのスタジオで設置されている楽器を見た。その後、SRK 神戸市青少年団体連絡協議会（ユープラ施設受託団体、以下SRK）の南平氏（SRK 事務局長）と佐野氏（SRK 運営委員長、ユースプラザKOBÉ・WEST 副会長）に会い、私たちが考えてきたイベントについて話したところ、ユープラで1周年記念イベントがあることを伝えられた。そして、その1周年記念イベント企画運営にたずさわることを勧められた。それに伴い、ユープラにかかわり入り込むのなら、周囲に対し私たちの素性をはっきりさせたほうが良いとの意見を頂戴した。

この日、佐野氏にアポイントなしで会った行為に、山田は相手に失礼であり、これからはもっと大人と対応できるようにならなくてはならないと感じ、岡田は社会の当たり前前に改めて気づき、社会勉強が始まったのだと思った。

10

地域全体を巻き込むようなイベント案を掲げた。イベント実現に向け正式に活動許可を SRK から得ることが当面の目標となった。また実際にどれほどイベントがユープラ利用者に期待されているかを測るためにニーズ調査をすることに決定した。またボランティアとの親睦を図る必要性についても討議された。さらに、具体的な企画書に向けて意見を出し合い、学校で企画書を作成し、先生にメールで送るための作業をした。しかし、企画書作成という作業においては、岡田に頼りがちになってしまうのであった。

森山は私たちのプロジェクトに対して、自信・期待を感じる一方、不安も同時に抱えていた。山田は企画書を作成する上で理論立てて考える楽しさを味わうと同時に、考えを文章化していく難しさと語彙力の無さを感じていた。イベントに関しては、私たちだけがしたいようなイベントとならぬよう、ニーズ調査によって利用者の希望を聞こうと考えた。そして、山田はユープラを常に共同管理の場所だと利用者に考えて欲しいと願っていた。山口は、企画書の正式なフォーマットが不明なまま作成していくことに不満を覚えていたと同時に、企画書を岡田に任せ気味になっていたことに対して罪悪感があった。しかし、主となって岡田が企画書を作成していたことに対して、長い時間をかけて話し合った企画書においては満足していた。メンバーと話し合っていく中で、ユープラだけでなく、名谷全体を巻き込んだ文化祭のようなアイデア豊富なメンバーに、感心していたのだった。そしてライブイベントも8月後半にあると知らされていたため、拠点と活動目標を一挙両得したことに喜びを感じ、ボランティアとの親睦を図るなど、様々なことを決めるうちに、やる気が湧いていた。大西自身も企画書に関して、文章作成・意見ともに岡田に頼ることが多く、このままでいいのかと思うようになっていた。

2月24日。神戸市中央区東遊園で行われた震災復興記念イベントに関わった。イベントの出演者に対して、公演活動の発端、気持ち、活動から得たことなどをインタビューし、私たちの卒論の趣旨と照らし合わせて考えてみた。そして、公演の裏方として働き、8月後半のユープライベント裏方予行演習のような体験をすることとなった。

山田は、イベントを行っていく上で、その規模が大きければ大きいほど、上に立つものの責任は重く、頭は柔らかく融通の聞く存在である必要性を感じていた。そしてこのイベントの参加者の多さに感動したのであった。山口は、イベントの裏方をするということは、思った以上に大変な仕事なのだということを身にしみて感じた。岡田はあまりに多くの人が、そこにボランティアという関わりをしていることに、新たな世界を見た気がしたのであった。

3月2日。この日、自分たちの企画について、SRK 佐野氏に尋ねること、ユープラ利用者のニーズを調査するためのアンケートの内容を決めた。このニーズ調査は、ユープラにおけるライブイベント実施の必要性を、ユープラ側に立証するためのものでもあった。このように、着々とユープラでのイベントの準備が進むに連れて、森山・大西は、卒論が音楽から離れていくような気がして、不安がよぎっていた。

3. 3月4日～3月11日

3月4日。この日、企画書第4段を作成した。山田は趣旨を明確にした企画書の作成に難しさを感じた。そして、森山はこの日も卒論がますます音楽と離れていく気がして、不安を募らせていった。

3月5日。ユープラにて SRK 佐野氏と1周年記念イベントについて話し合った。あらかじめ、作成してあった自己紹介文から私たちの素性を明確に述べ、自分たちの思いを伝えた。この日の成果は、ユープラは青少年対象の施設であり、大人の利用を控えていること、ユープラから神戸市に援助金の申請が行えること、イベントの広告に神戸市の広報が採用できること、ユープラの施設の外（市営地下鉄名谷駅前付近）は開発センターが管理していることなどを、知ったことであった。

山田は、自己紹介の時に先生の名前による後ろ盾が欲しい、また自分たちのしたいことをはっきりと主張したいと考えていた。佐野氏との話から、助成金の申請が出来ること知り、それに対してこれから活動していく上での障害がひとつ減ったと嬉しく思った。こうして SRK と関わっていく中で山田は、ユープラでの権力者が誰であるのか知りたいと思い始めていた。そうすることで、これからイベントの話を進めていく上で、誰に許可を得たら一番動きやすいかなどを、知りたかったのだ。山口は、ユープラが青少年対

象施設ということで、私たちの目標のひとつであった異世代間交流から遠のき、残念な気持ちになっていた。イベントの広告に関しては、ありがたく感じた。また施設の外でゲリラ・ライブも可能であるという施設の人らしからぬ発言に驚いた。施設が他と連携しており、何においても即決できるわけではないことを知った。そしてこの頃から、山口の仕事はインターネット上のプロジェクト専用掲示板への記録の投稿となった。山口のこの仕事に対して山田がいつも評価をしていた。山口にとって彼女の仕事を覚えてくれているという山田の存在は嬉しかった。大西はゲリラ・ライブが可能かもしれないということに嬉しく思っていた。この日、ユープラを訪ねたのは森山を除く4人であった。ニーズ調査の具体的作成に進んだのもこの日であった。

3月10日。ニーズ調査の表紙を作成した。またニーズ調査のために、私たちが誰であることを明示した大判のポスターを掲示するようにSRK 南平氏より言われていたため、模造紙に名前や写真を貼り付けポスターを製作した。岡田は自分の名前や写真が公然と貼られることへの不安を感じ、乗り気ではなかったが、写真の写り具合の良さに喜んで掲示に賛成したのであった。

3月11日。イベントまでのおおまかなタイムテーブルをつくり、ニーズ調査の質問内容を考える。

山田はメンバー全員が自ら卒論に参加し、進んでいく姿を嬉しく思っていた。山口は、就職活動と卒論の平行で、体力的にも精神的にも参っていた。

3月12日。ユープラでのニーズ調査開始。ニーズ調査隊である私たちのポスターをユープラに掲示する。

4. 4月1日～4月25日

4月1日。ユープラへニーズ調査に行くが、ニーズ調査の集まりが悪く、次の策を考える。

メンバーはニーズ調査の集まりの悪さに危機感を感じていた。ユープラで活動するにあたって、SRKおよびボランティア内部に入る必要性を感じ、ユープラでのボランティア活動を考えた。しかし、調査を行うために、名谷に足を運び、利用者にアンケート記入を頼むことを億劫に思っていた。山口は、山田の提案によるボランティア活動がアンケートと平行して出来ることに感心していた。大西はボランティアすることに四苦八苦するだろうと思ったが、他のメンバーが金も時間も大西自身より費やし、忙しいのにも関わらず実行すると言っている以上、やるしかないと前向きに考えるのであった。

4月12日。山田、山口が別の卒論の班に便乗して、神戸市役所に行く。行政に対して、イベントはユープラ主催であり、PIが企画運営に参加する旨を伝える。

山田は行政の話の切り口の厳しさに、自分たちの視野の狭さを感じていた。一方、私たちが関わろうとしていた事業内容が明確になり、気分的にすっきりしていた。山口は改めてイベントの企画運営は思っているほど簡単でないことに不安になっていた。担当の方が話をされているうちに、私たちが別の事業に乗せようとされていたことにも不満を覚えていた。大西は担当の方にゲリラ・ライブを却下され残念に思っていた。

4月14日。大西、山田、山口がユープラのボランティア会議に出席する。この会議でイベント事業には既にSRKが助成金を得ていたことを知った。会議中、イベントの責任者を問う中で、ユープラの組織の不完全さが分かった。会議後は、初めてユープラでボランティア活動のようなことをする。

山田はこの日に体調が悪く、会議に出席していたメンバーに申し訳ないと思っていたが、あまりの疲労に途中で帰宅する。山口は以前のボランティア会議での失敗がトラウマになっていた。そのため今回の自己紹介に緊張していた。自己紹介を一通り終わると、議題に入った。会議が始まると、山口はボランティアとSRKの意思疎通が上手くいっていないように思われ残念だった。助成金の話が出てきたとき、助成金が機材の買い替えにあてがわれることが分かるが、残高が分かるまでに2ヶ月かかると聞き焦っていた。そして、体調が悪いのにも関わらず、必死になってユープラまで来た山田の卒論に対する姿勢に感心したのだった。山口がボランティア会議で自己紹介をしたことに大西は感謝しつつ、自己紹介できない自分自

身にうんざりしていた。

4月16日。この日はゼミがあった。講義は住民参加プログラムの企画についてであった。その中での重要なポイントは、住民のニーズに合った参加方法の選択であった。そして「我が事と思う人たち」つまり「ステークホルダー」を集めることが重要であるということ学んだ。山口はこの「ステークホルダー」について不安に感じていた。というのは、それを見つけるのは難しいのではと思ったからだ。しかし、この時岡田は「ステークホルダー」には俺たちがなってやるのだとやる気を見せていた。一方そのころ、山田は体調が回復せずメンバーに申し訳なく思っていた。

4月18日。山田は、この日初めて一人でユーブラにボランティアに行った。そして何をしたいのか分からず、掃除をし、窓を拭いたりして時間を過ごした。そこでボランティアたちと色々話をしていくなかで、これからはもっとボランティアたちと仲良くしていかなければいけないと焦った。

4月21日。ユーブラで活動中のボランティア対象の研修（SRK 主催）に大西が行った。

4月23日。この日はゼミの時間に全員で、見積もりの見直しと企画書について話し合った。山田は、煮詰めなくてはならない点が多すぎることに焦りを感じ、何かやらなくてはいけないことで、洩れていることがないかと不安だった。そして、山口はユーブラが指定してきた実際に使える金額と、私たちが予定していた金額との差に愕然とした。また、このあたりから掲示板への投稿を当日にすることがなくなり、自己嫌悪に陥った。一方で森山はイベントに対して楽観的だった。

4月25日。ユーブラに、山口と山田はボランティアに行った。二人は掃除などをした。山田はボランティアや SRK の方の輪に入ることが出来ず、むなしさとさびしさを感じた。そしてこれからは不安になった。

5. 4月30日～5月8日

4月30日。ユーブラにて、全員で話し合った。この日は企画書を見直し、5月8日のボランティア会議で発表するイベントについての内容を考えることと、ニーズ調査の結果をまとめた。そして、自分たちにとってのイベントの成功とは「後継者を見つける」ことだと決めた。またイベントを進めるに当たって、確かめなくては分からないことが多すぎて山口は大変だと思い、SRK 佐野氏に色々なことを伺った。山口はイベント出演者の募集や場所もユーブラに絞りすぎて、当初 PI で考えていた企画から離れてしまったような気がして残念だった。そしてユーブラの組織図がずっと不明瞭なままに進むことに不快を感じた。またこの頃から森山の発言及び発表が多くなり、メンバーの連携プレーの存在に気づき嬉しく思う。山田はイベントの成功を想うと期待で胸が膨らみ、新たに熱くなって頑張っていくことを決心した。また、イベントの土台作りを改めて考え、出来ないからと言って人任せにせず、みんなでイベントをつくっていくのだと思った。その頃森山は、自分の PI 内での存在価値のなさに恐怖と、そして卒論に対して何も考えていない自分に戸惑いを感じた。そして、イベントに対して少しずつ自分のやりたかったこととズレている気がして不満を持っていた。同様に大西もそのような思いを抱き当初ほどやる気がなくなっていた。また、企画書作成など、自分で意見を出していかなかったり、振り返りをあまりしなかったりしたことに申し訳なさが積もるのだった。岡田はユーブラのパソコンを直し、そのことでボランティアとの距離が一気に縮まり、その急変に戸惑いを隠し切れなかった。

5月3日。ユーブラでのイベントのためのニーズ調査を終了。

5月8日。この日、ボランティア会議で、森山が PI のイベントおよびニーズ調査について発表した。そして、私たちがこのイベントに本格的に企画側としてかわる旨を伝えた。その時森山は、意図したことが十分に伝わったか不安だった。そして SRK やボランティアに PI の企画を発表できたことが嬉しいとも

感じた。一方、ボランティアたちが一体何を目的にして活動しているのか分からず、メンバーは彼らに対して失望と不信感を抱いた。彼らが代表を選出できずに責任の押し付け合いを繰り返す態度に見苦しいとすら思った。山口はPIとしての存在は認められているが、ボランティアとの距離はすぐには縮まらないと感じ残念に思う。岡田は前日に森山が発表する為の原稿を、ボランティアたちに、私たちのことを知らしめたい、認めさせたいという強い思いを込めてつくった。そして岡田には、森山に活躍して欲しいという期待と、ボランティアたちの強い個性に負けないPIという色を出す自信があった。

6. 5月、5月13日～5月26日

5月頭頃、山口は、この月から用事で卒論から抜けることが多くなり、メンバーに対して申し訳なく思っていた。

5月13日、イベントの具体的な必要事項についてミーティングを行い、第2、第3アンケート案を出した。山口は1周年記念イベントに乗せて進んでいくのはいいが、自分たちが望むイベントの企画とずれた気がした。そしておよそそのイベントまでのスケジュールを決め、すべきことの時期が分かり少し安心した。そして森山は自分たちのイベントをつくれることが嬉しかった。

5月14日、ゼミにて話し合いを行った。そこでイベントの広報代や宣伝活動のこと、また音楽に興味がある人のための体験音楽教室を開く案を出した。しかしこの時、山口は体験教室を開くだけの時間はないだろうと考えていた。

5月19日、ユープラにて辻氏（SRK事務局次長、ユースプラザKOB・WEST交流部会長）、SRK南平氏、井上氏（SRK会計）と一緒に話し合う。イベントまでの前日までと当日のタイムスケジュールを考え、他の詳細についても決めていった。また、バンド申込書、ポスター、チラシ、第2アンケート案を出し、作成し始める。森山はイベントに対しての熱い意気込みを感じた。そして一方でイベントの参加料に対して不満があった。メンバーはやる事がすっきりして見えてくる反面、自分たちがしたいと考えていたことができないと分かり喪失感を覚えた。大西はダンスなどを含めて、2日間やるということになり面白そうだと感じる一方で、そんなに手を広げて大丈夫なのかと少し不安になった。そしてプロを呼ぶ案に対して必要がないと思った。また機材などに対する資金の使い方についてなど、どこまで口出しをしていいのか分からず、角が立たないように黙っておく大人の世界を垣間見たように感じた。岡田は実際にイベントを行うという実感が生まれ、任されるという責任を感じた。山田はイベントの日程が決まった時点で、自分のクラブの引退日と重なることが分かりショックを受ける。そして、企画が進んで行くに連れて卒論にどう書けばいいのか分からず、みんなに思ったことを書き留めておいて欲しいと思う。

5月20日、山口は山田のクラブの引退日とイベントが重なり、驚き、ショックを受ける。

5月21日、ミーティングをする。イベントに参加することで得られるメリットについて考えた。また出演者をイベント前に何度か集め、自分たちのイベントだと感じてもらえるように運ぶことにする。そして岡田はポスターとチラシの案を、岡田以外の4人各自で第2アンケート・出演者募集シートの案を作成してくることが決まった。そして卒論のために、昨年の先輩方の卒論を読むことにする。山田はこの時、もともと5人で卒論やそれ以外のことも話し合いたいと思う。そして出演者にイベントを手伝いたいと言わせたとも思っていた。また、どんな卒論になるのかと不安を覚えていた。山口は私たちの悪い癖は、せっぱ詰まらないとなかなか作業を始めないところで、そろそろ卒論のまとめ方も考えなくてはいいけないと焦りを感じ始める。

5月24日、ユープラにて全員で各自の第2アンケート・出演者募集シート案を見せ合い、大西の案に決定する。岡田はポスターとチラシ案を出す。そしてユープラでのイベントの効果について考える。山田は、メンバー各自が課題をこなし、そのことにやる気を感じ嬉しかった。

5月25日. 山田が5月24日に話し合った内容から、アンケートの原案を書く。

5月26日. SRKの方のコンサートに行く。森山は、コンサートを聴き、感動した。

7. 5月28日～6月15日

5月28日. 調査の不明な点を、統計学の先生に質問に伺う。しかし、完成されたアンケートは、その後のゼミで、指導教授に「違うんだよ！アンケートと調査はさあ！こんなものは調査じゃないよ！」と机に叩きつけられ、アンケートでは意味がないと問答無用に却下されてしまう。そこで指導教授にリッカート法という社会調査法を使用することを勧められた。

メンバーは、指導教授にアンケートを却下されたことにより、ショックを受けるとともに、調査に関して勉強不足を痛感した。が、同時に、血と涙の結晶であるアンケートを粗末に扱われたことが不愉快極まりなかった。大西は、素人のアンケートではなく、学術的な裏づけに基づく調査をしなければいけないことにプレッシャーを感じ、一方、森山はアンケートに関して、指導教授から言われたことに納得していた。そして岡田は、却下されたことによって卒論の形が調査というものになったことに安心し、学問をするということに岡田自身が戻ることが出来たような気がしていた。

5月31日. ユープラでSRKの方とミーティングを行う。そこでイベントの詳しいタイムスケジュールを作成した。イベントの担当を決め、イベントアシスタントを募集する案が出た。この日から、出演者の募集を開始する。調査に関しての課題としては、質問を各自100問ずつ考えることとなった。

山口は、班のミーティングではなく、施設の方たちのミーティングにも遅れてくるメンバーに対して怒りに震えた。一方、山田は、義務的な卒論ではなく、この卒論は自分たちのものなのだと思った。そしてすべきことが多くても皆で頑張ろうと闘志を燃やしていた。また仕事を分担し、効率よくイベントを進行してきたいと考えた。大西は、調査を思った以上に真剣にしなければいけないことに戸惑を隠せずにいた。一方、暫定的な仕事の担当が広報に決まり、不安になるが、がんばろうと思ったのだった。

5月下旬. 大西は、大西自身が描いていた卒論の理想とは違っていたが、現実的に考えると順調に進んでいるように感じ、心地良い満足感を覚えていた。

6月上旬. 大西は、本などを読むうちに調査が嫌になる一方で、他のメンバーが前向きに頑張っていることに感心し、大西本人も「頑張らずにはいられない」という気持ちで一杯になった。

6月3日. 山口はイベント準備が進むにつれ、8月の社会福祉士現場実習により山口自身が卒論から抜けることに焦りを感じていた。

6月4日. ゼミでホームページの写真を撮る。5月31日の各自で出した100の質問項目について話し合い、質問を概念ごとに区分けしていった。そして、指導教授から、質問をKJ法で作業を進めていくよう指導を受ける。そこで山田は、調査を作成するにあたり、能率が悪く、どのように進めていけばよいのか分からなかった。一方、岡田は調査を作成することが作業になり、面倒に思い始め、森山は調査の質問概念に疑問を抱く。そして山口は、初めからKJ法で質問の作業を進めていけばと後悔し、さらに、指導教授がイベントの成功失敗よりも、実態を見極めることの重要性を言われ、前者を気にしていたことにハッとするとする。

6月6日. 森山、調査の概念について掲示板にて意見する。

山口は森山の内容ある投稿に驚きまた喜んだ。そして森山が掲示板に投稿した概念についての意見に同意するが、調査の質問の仕方には気を配りたいと考えた。山田は私たちが調べたい概念の再確認が必要だと考えた。

6月9日. 岡田によって卒論プロジェクト専用ホームページが設置される.
岡田にとってホームページ作成作業は至福の一時と化していた.

6月14日. 出し合った質問の数を124問までに絞り込み, 調査質問をPCに打ち込んでいった.

6月15日. 調査質問を概念ごとにわけ, 掲示板に各自投稿する. そして, 再び森山によって, 調査の意義についての意見が述べられた. それにより, 山田は, 調査をする意義の要点が, 明確になったことによってスッキリし, 嬉しく思っていた. 大西は森山の頑張りをたたえた. 一方, 山口は森山の投稿に, すぐ意見を述べる事が出来ず, 悔しい想いをしていた. そして, イベントを進めていくうちに, プロジェクトが本来何を目的にしていたのかを忘れそうになり, 目的を見失わないようにしなければならないと感じていた.

8. 6月16日~6月30日

6月16日. SRK 辻氏と井上氏とミーティングをし, イベントまでのタイムテーブルの練り直しをする. そして, チラシをユープラ近隣の学校に持っていくことが可能であるか調べる必要に迫られた.

山口は, またもやメンバーが遅刻してきたことで, PI 以外のミーティングでの遅刻は先方に失礼だと感じ, 遅刻したメンバーに対して怒りを覚えた. イベントに関しては, タイムスケジュールがはっきりしてきたことにより, いよいよイベントに向けて活動していくという実感を得る. そして, 辻氏・井上氏という存在に改めて頼もしさを感じた. 一方, 岡田はこの時期にチラシの作成にも手をつけ始め, イベントにやる気を一層覚えていた. しかし, 調査作成に限っては, 他のメンバーに任せがちになり, 清書を請け負う程度にしか関わらないという手抜きさ加減を自分自身に感じていた.

6月18日. 調査堂々完成. (124問)

6月20日. ポスター・チラシの部数について考える.

6月22日. 大西がユープラにボランティアをしに行く. この日は森山も行くはずであったが, 結果的に大西一人が行くことになってしまった. 大西は, 森山と一緒にいないことで, 淋しさ, 孤独との戦いにさらされる. 試練であった. また, 社会調査を作成する作業が進むにつれ, 適当なところがあると感じつつ, そのままにしまっていた.

9. 7月2日~7月10日

7月前半. 大西は出演応募のバンド数が集まっていない事に焦りを感じるとともに, 残念で仕方がなかった.

7月2日. この日はユープラに行き, SRK 辻氏と話し合った. そこでイベントのPRと調査のために, ユープラ近隣の高校や中学校に行くことが可能か尋ねた. そして, すでに中学校の校長会議でその話が通っており, 高校には行政の許可が必要であることを知らされる. 山田はその行政の許可のために, イベント企画と調査に関してのプレゼンテーションをしなくてはいけないと思った. そして公立校の終業式(7月19日)までに時間がないと焦った.

7月4日. ボランティア会議に出席する. そこでボランティア側からイベント当日8日, 9日のチラシの内容についての要望があったことを知らされた. 8日の詳細が足りないとのことであった. その後, ミ

ーティングを行い、イベントまでのタイムテーブルを書面にする作業をする。そして、SRK 辻氏から行政への中間報告を勧められた。

7月5日。大西がイベント出演者の個人的なライブに行く。

大西は他のメンバーがライブ行けなかったため、一人で行くことは嫌であったが、気合で現地に行く。しかし「これではだめだ」と思いつつも気持ちに嘘はつけず、差し入れだけしてすぐにライブ開場から去ったのであった。

7月8日。森山、山田、山口はユープラに行き、イベント部会（9月8日担当のボランティアたち）とミーティングを行う。9月8日のチラシの詳細に関してボランティア側から要望を聞き、変更箇所の連絡を岡田にすることとなった。その後、チラシ・ポスター、社会調査の部数を考えた。そして SRK 辻氏からイベント開催について神戸の区民版情報誌に掲載される事を知らされる。

10. 7月11日～7月28日

7月11日。学校で調査を行う許可をもらうために、大西・山口が行政にお伺いを立てに行く。しかし124問の質問数の多さは生徒にしてもらうには無理があるということに加えて、行政の管轄する施設であるユープラの名を引用している調査を、ユープラ施設外で行い何らかのクレームが出た場合、行政の責任となるとということから学校への調査を却下された。

山口は、却下されて初めて本当の意味で焦り、行政に随時連絡していなかったことを後悔した。大西も却下されたことで気を落とし、もっと上手く説明し了解を得られなかったことを悔やむと同時に、メンバーに対して申し訳ないという思いで一杯になった。却下の連絡を山口から受けた山田も大きな衝撃を受けていた。

7月12日。山田が調査の件について、行政に私たちがやりたいことはアンケートではなく、社会調査なのだという事を伝える。しかし、行政側から問題数が多いことと、同じ内容の質問が重複していることを指摘される。

山田は、指導教授から了解を得た調査が、行政側から却下されたことに不満を感じ、この調査を行政側が正しく理解しているとは思えなかった。森山・岡田も行政に対して不満を覚えていた。岡田自身は行政に対してどのようにしたら社会調査を実施できるのか、その手段を模索していた。

7月14日。メンバー全員が神戸市長田区に「まちづくり」についての話を聞きに行く。市民と行政の考え方の違いを知り、長田の「まちづくり」のコンセプトを参考にした。その後、ユープラに行き、ボランティア側から9月8日のチラシの詳細を頼まれる。

メンバーは、長田の「まちづくり」のコンセプトは私たちの卒論の原点だと感じられた。また、それに取り組む人々の柔軟な考え方を目の当たりにし、やる気を喚起された。山口は、「音楽の町・長田」というコンセプトが素敵だと思い、山田は、頭が柔らかく、何ごとにもフットワークの軽い人々が長田をまとめていっているため、今以上に良い町になると思った。そして、多くの刺激的な話を聞き、またイベントに向けて頑張ろうと感じるのだった。森山は、長田の人々の力強さに感動し、大西は話を聞き、行政に調査の許可をもらうための闘志が湧き起こったのだった。

7月16日。岡田・大西が SRK 佐野氏を訪ね、SRK から行政に、私たちの調査ができるようにとお口添えしてもらえないかをお願いしに行く。そしてその結果は、翌日電話で頂戴できるとの約束を取り付けた。

7月17日。この日の朝、山口のもとに一本の電話がかかってきた。それは SRK 佐野氏からの電話で、その内容は社会調査に関して行政の NO は SRK で YES にはならないというものであった。その後、山口は行政に電話し、何故調査が駄目なのかを聞いた。そして、行政が望む調査の枠組みが FAX で彼女の

とに送られてきた。しかし、なんとそれは以前私たちが指導教授から却下されたアンケートの内容と類似していた。これらに対して、メンバーは行政のいいなりになっている SRK に失望し、負けたくないといふ決起し、学生である私たちの力でなんとかしようと決断を下す。山田は、指導教授と行政との間で調査に対する考えに差があるように感じ、行政が本当に調査について理解しているのか疑問に思う。一方、電話をもらった本人である山口は、社会調査をあきらめつつあった。

その日の午後、イベント部会とのミーティングを行った。このミーティングで9月8日の企画をしているボランティアたちが当日、ユープラのフリースペースで何か催し物をするのを私たちは知った。また、私たちも9月8日のお手伝いとして吹奏楽の出演勧誘することに決定した。

この時、山田は人任せのボランティアに怒りを覚え、同様に森山も9月8日のことを押し付けてきたことや、私たちの企画内容にまで口を挟んできたことに不快感を覚え、彼等を嫌悪した。

また、この日に、9月9日に出演を予定していたプロ歌手のキャンセルが決定した。さらには、この日に横の野外広場で開催される予定であったラモスの公演に関して、雨天の場合は私たちが使う予定であるホールを使うことも発覚した。この時、サッカーをこよなく愛す森山はラモスに会える事に感動し、当初プロ歌手の出演に難色を示していた彼は、プロ歌手のキャンセルに安堵の表情をあらわにした。

7月22日。出演バンド選考を行った。幸いにも19バンドが申し込みをしてきていた。その中から14バンドを選出しなければならなかった。デモ・テープを聞きながら、山口はバンドの上手さに驚き、山田はどのようなバンドが選ばれるのか楽しみにしていた。一方で、森山は似たような音楽趣向のバンドの多さに少しがっかりしていた。大西は出演バンド数を当初予定していたよりも増やし、1つのバンドごとの持ち時間を減らすことに異議を唱えた。結局のところ SRK 辻氏に説得され彼も納得し、長時間に渡る出演バンド選考は無事終了した。みな様に安堵したのだったが、落選バンドにその事実を伝えることに山口は一人辛さを覚えていた。

選考終了後、引き続き今後のスケジュールについて議論した。7月30日に出演バンドに集合してもらうことが決定した。またユープラの設立にいたる背景と PI の活動理念との照らし合わせも行った。この新たな展開から岡田は徐々にアクセルがかかっているのだった。山田は9月9日の別の野外催し物でラモスに会えると聞き喜んだのだった。しかし、雨天時には私たちのイベント用ホールでラモスが公演するため、イベントの時間を変更せざるをえないことに不安を覚えたのだった。

7月28日。PIでミーティング。社会調査および7月30日以後のスケジュールについて。社会調査に関しては質問数が106問から75問へと変更された。

山田と森山はこの時、久々の全員集合に喜び、プロジェクトに対する当初の情熱を思い出し、また森山は社会調査に自信を持ちつつも、7月30日に控えている行政への社会調査のプレゼンテーションと、第1回出演者ミーティングに焦りを感じていた。逆に山口は社会調査の難しさを痛感する一方、今後のスケジュールについては、SRK と PI の考え方の類似性から、安心感を覚えていた。

11. 7月30日～8月4日

7月30日。出演者との緊張の初顔合わせ。ミーティングは SRK 辻氏の挨拶に始まり、私たち PI の自己紹介からイベントの内容説明へと進んだ。私たちは出演者の積極性、素直さ、礼儀正しさに驚きを感じ、嬉しく思い、今後の自分たちの活動への自信と彼らに対する期待感でいっぱいになった。その一方で、イベント実行委員として気を引き締める決意をし、改めて自分たちの準備不足に反省をするのであった。この日、司会進行役だった森山は、自分の役目に不安を覚えつつ、辻氏の挨拶の上手さに驚きを隠せずにいた。

その後、社会調査のことで市役所を訪問した。社会調査に関して自信を持っていた森山は以前一度訪問し社会調査の却下を受けた山口のためにあえて強気な発言をし、励ましたりしていた。山田も今回がラストチャンスだと考え、気合を入れていた。プレゼンテーションをしている山田と山口を見て、森山は彼女らに任せようと横で見守っていた。結果、私たちは社会調査の許可を得ることに成功した。これに対し、みな様に喜びを感じた。山田にいたっては以前社会調査の却下を叩きつけられた山口と大西に感謝した。

そして調査に関して少しでも勉強した甲斐があったと思い、ここから前に進むことができると、期待で満ち溢れていた。大西もまたみなに対して感謝の気持ちでいっぱいだった。

その日の夜は辻氏・井上氏とお酒を酌み交わすことになっていた。私たちは社会調査の許可を彼らとともに喜び、私たちが常に支えてきてくれた彼らに感謝し、さらなる信頼関係を築くにいった。この日、岡田は市役所訪問のための書類の作成・完成に力尽き病床に伏していた。メンバーなら必ず調査には許可を、出演者ミーティングには良い手応えをつかんでくると信じていた。メンバーを信頼し任せつつも、岡田は自ら書類を作成、完成させたことに対して自信と満足感で満ち溢れて療養していた。そこへ辻氏・井上氏との飲み会の現場から、メンバーたちの意気揚揚とした声が届けられた。一目散に駆けつけた岡田はそこで、社会調査の許可に熱く酔いしれている皆に対して自分も何かこみ上げてくるものを感じていたのだった。それを励みにして、1週間におよぶ社会福祉士の実習キャンプに行ける彼がそこにはいた。そして山口もまた確かな満足と安心とともに、1ヶ月におよぶ社会福祉士の実習へと旅立ったのであった。

8月2日。第二回出演者ミーティングの内容について話し合う。イベントの裏方の仕事について考えた。調査に関しては、先日行政に指摘された意見を考慮しながら修正をした。

山田は、8月7日のミーティングの為に、下準備をしっかりとし、出演者がイベントに参加しやすくなるようにしたいと思っていた。そして、メンバー全員が忙しいこの時期こそ、動ける人でしっかり準備を進めていかなくてはならないと思ったのだった。森山は、次のミーティングに不安を覚える一方で、気合を入れなおしていた。そして、この時期山田が疲労していたのを見て森山は心配するのだった。

8月4日。森山・山田が概念ごとに配列された調査の問いをランダムに振り分ける。

山田は、メンバーが忙しい中で、出来る人が少しでも作業を進めていかなければいけないと感じていた。森山は岡田がいない分、森山本人がしっかりとせねばという気持ちから、使い慣れぬパソコンに悪戦苦闘しつつも、社会調査を完成させ、ほっと胸をなでおろした。

12. 8月7日～8月10日

8月7日。第二回出演者ミーティングを行う。アイスブレイク（自己紹介）をしてもらい、バンド同士の親睦を図った。その後、これからのイベントについて話し合い、出演バンドにホールを見せ、バンドごと個別に話しをした。

この日は森山自身が遅刻したにも関わらず、遅刻してきた岡田や大西に対して不満に思っていた。森山はミーティング前に一人で椅子や紙を用意している時から冷や汗が出るような思いをしていた。そして会議室が50人の人間でいっぱいになり、さらに自己紹介に失敗し焦った。一方、後で出演者と時間をかけて話せたことを嬉しく感じ、個別に話をすることが大切だと思った。そして、頑張っただけで出演者の顔と名前を覚えようと決意した。しかし、話をしている時、出演者の反応の鈍さに焦りを感じるのだった。岡田もまた、意外と冷めている出演者に対してショックを受け、彼らが意欲的になるまでぶつかっていこうと決心したのであった。大西は、出演者とコミュニケーションが図れないことをイライラし困惑していた。またそのことでメンバーに申し訳なく思っていた。

出演者ミーティング後、ボランティア会議が行われたが、森山はボランティアに対して疎ましさを感じていた。

山田はこの時期に、卒論と部活の板挟みで忙しく首が回らない状態であったが、出演者ミーティングの話を聞き、しっかりイベントが動き出していると思った。そしてこの時期にがんばっている男性3人が頼もしく思えたのだった。

8月10日。第三回出演者ミーティングの内容について話し合う。7日のボランティア会議の反省点を踏まえつつ、これから決めていかなければいけない点について話しあった。この日の決定事項としては、当日に向けてホールとパンフレット係の二つに担当を分けて作業をしていくことになった。そして、大西は出演バンドに次回8月15日の出演者ミーティングの連絡を入れた。イベント運営や企画に対して私たちがまず率先して考えることが大切だと森山が考え始めたのもこの日からだった。

また岡田はミーティングに現れた山田の全身にみなぎる疲労感をみて、岡田自身のやる気としてそれをとらえたのだった。そのような部活で疲労困憊の山田はメンバーが必死で考え、作業しているのを見て嬉しく感じ、頼もしく思っていた。男性3人の頑張りに対して感心し、部活で忙しいからと言って、メンバーに甘えて何もしないというのではなく、出来る範囲で絶対に仕事をこなそうと決意していた。

13. 8月15日～8月22日

8月15日、第三回出演者ミーティング。ホール/パンフレットの各班に担当を分ける。ホール担当はホールの中で見取り図を見ながら実際に作業をし、バンド出演者と話し合い、おおまかなホールの内装を決めた。パンフレット担当も作業が進んだ。

山田は、出演者が思っていた以上にホールの内装のことを真剣に考えていることが分かり、嬉しく思っていた。また誰一人として、冷めた態度で臨んで欲しくないと思っていた。そして、森山が必死でホール担当を仕切っていたのに対して、補佐をしっかりしなければならなかったと感じていた。この日、出演者に対する信頼感が森山の中で少し生まれた。一方、岡田はそんな森山を頼もしく思い、岡田自身にやる気を、森山に対し信頼を感じていた。

8月17日、大西と森山がユープラに行き、当日の流れについて話し合う。

8月20日、PIでミーティングを行う。イベント当日のおおまかな流れ、裏方の仕事の順、21日のPAとのミーティングで話す内容を決めた。

この時森山は定刻に大幅に遅れたことを深く反省する。一方、時はまさにイベント準備の山場で、それを肌で感じ、期待に胸を膨らませる森山でもあった。イベントへの意欲に燃える熱い森山は、当日の流れや準備などをもう一度頭の中で整理しようという冷静さも忘れてはいなかった。また、その頃SRK辻氏が信頼を持って、イベントをPIに任してくれていることを嬉しく思っていた。

8月21日、台風の中、ユープラにてPAと大西・岡田・森山がミーティングを行う。

この日、森山・岡田は遅刻。大西は二人が来るまでの間、PAと一人で話し合いを進めることになる。この時、大西は焦りに焦っていた。PAに関して森山だけに任せきりではいけないと思いつつも、任せていた自分にツケがまわってきたと感じ、後悔・反省する。岡田は、台風の中、出演者が来てはいけないと中止の報告を流し、ある出演者からミーティングの確認の入電を受け、彼ら自身が予定を気にしていることを知り、意気込んでユープラへと向かったのだった。森山は遅刻したことで辻氏に対し申し訳なく思い、自分にたいする甘えがあったと反省するが、台風と疲労によりやる気を幾分か失っていた。

8月22日、森山は岡田のイベント進行表作成の仕事に感心し、岡田に対する信頼を増す。

14. 8月23日～8月31日

8月23日、第4回出演者ミーティング。イベント当日の進行が決定。9月8日担当ボランティアとの調整も進められる。

森山は、バンド同士で出演順について話し合う姿に感動するとともに、出演者たちと他愛もない話が出来たこと、顔と名前的一致だけでなく、出演者の性格も少しずつ分かるようになってきたことに嬉しさを噛みしめ、イベントに対して俄然やる気を持つ。また、個人的に性格が合う、合わない（えこひいき）でバンドを判断しないように気をつけるように心がけてもいた。しかし一方で、出演者を冷ややかな目で見ているボランティアを見て、ユープラの理念である「子どもたちの居場所づくり」の実践は難しいのではないか、と感じていた。そしてSRKには施設の用紙を大量に使用したことに対して後ろめたさを感じ、イベント当日に横の広場で行われる講演のゲストがラモスから高木に変わったことを少し残念に思ってい

た。山田は、出演者に関わる絶対的時間が少ないことに反省する。また、この時期多忙につき、少し不安を持っていたが、同時に、岡田・森山・大西に頼もしさを覚え、安心感も抱いていた。

8月27日。イベント当日のタイムテーブルが完成し、PIとPA、数名の出演者と会議を行う。

この日、森山はPAに対して不信感を抱く。また、忙しいSRK 辻氏に代わってイベントに関してPIの責任の重さを認識する。

8月28日。ユープラにてイベント部会との進行調整をし、互いのスケジュール・予定を確認する。また、ボランティア会議の議長を務める田中氏らとミーティングを行う。その時、岡田の作成した9日のタイムテーブルを見て田中氏らはイベントを安心して任すことができると誉める。が、森山は見くびられていたことに不満を感じる。イベント部会との進行調整において、森山は9月8日担当ボランティアに対して不信感を抱き、岡田は失望する。

山口の実習が終了、PIに帰還。山口はプロジェクトの経過報告を聞き、進行状況が良好であることを感じ安心し、8月の抜けた分を取り戻そうと決心する。山田は、山口の帰還に安心感を覚えた。森山もまた、イベント当日に関して森山自身が気づかなかった点を指摘してくれた彼女の帰りを喜んだ。

8月。大西は苦手な調査に少しずつ慣れていくが、やはり苦しんでいた。また、岡田はイベントが山場を迎える一方で、調査に関しては気力を出すことができずにいた。

15. 9月頭、9月2日～9月9日

9月頭。このころ大西は出演者に積極的に関わっていないことや、イベントを煮詰めていく過程にあまり参加できていないように感じていた。そのことで、彼はメンバーに申し訳ないという思いが高まると同時に、自分に対して怒りを感じ、少し情緒不安定ぎみになっていた。

9月2日。この日はイベント当日までに行うことが出来る最後の出演者ミーティングだった。具体的には司会表・セッティング表などを提出させ、出演者と共に当日の進行の最終確認を行った。また、私たちはゼミの友人にイベント当日のボランティアの募集をかけることにした。

森山はこの日も会議進行役だった。自分の役割に対して責任感を感じてはいたが、話を聞かない出演者にわずかながらに不安を覚えていた。とは言うものの、このころになるとPIと出演者は気さくに会話を交わせる間柄に進展していて、出演者同士もまた良いムードで話し合えるようになっていた。そのことにメンバーは喜びを覚え、また、プロジェクトが確実に進んでいることを肌で感じ、メンバーとプロジェクトに対して、信頼と自信に満ち溢れていた。また、チラシ・パンフレットを出演者とともにつくれたことに対しても嬉しさを隠すことはできなかった。出演者が投票制度にやる気であることや賞品（音楽ギフト券1万円分）に驚いていることも、私たちにとっては新鮮であり、驚きの対象であった。

9月4日。ボランティア会議に全員ではじめて出席した。会議の内容は主に一周年記念イベントのことだった。一日目を担当しているボランティアたちは、自主的に仕事の分担をしようとはせず、自分たちの言い分を言うだけだった。SRK 辻氏は不満を言う彼らの絶好のターゲットだった。私たちはそんなボランティアたちに対して、憤りを感じ、また怒りすら覚えた。そして、辻氏に同情した。

一方、この日の会議でイベント2日目の経過報告の発表を任されていた森山は疲労のピークに立たされていた。結果、プレゼンテーションは失敗に終わり、彼は自分のふがいなさに歯を噛みしめていた。大西もまた、以前予定していた利用者数調査の実施を忘れていたことに後悔の念を覚え、落胆の色を隠すことができないでいた。

9月6日。この日は1日目担当のボランティアたちとイベント全体に関して最終打ち合わせを行う予定だった。1日目と2日目の進行状況をお互いに把握し、サポートする点を明確にするのがねらいだった。ところが、この日もボランティアはいつもと同じように、仕事を他人に任せることで頭がいっぱいだった。

森山は、彼らに不満を抱きつつも、9日の私たちのイベントも手伝ってもらうからと、しぶしぶ8日の手伝いを納得した。一方、山口も、このようにイベント直前になってもなおボランティアと私たちとの溝を埋めることができなかった自分たちの力のなさに、苦い思いを抱いていた。

9月7日。イベントの前日である。この日は出演者と共に会場設定（照明・仕切り・座席・舞台袖などの設営）を行った。会場設定の時間になって、出演者たちは次々と現れた。そして、予想以上に自主的に準備にたずさわる出演者に私たちは一様に感動し、喜びを覚え、彼らを頼もしく思った。彼らの表情は真剣そのものであった。しかし、作業は予想以上に時間がかかり、また、ともに準備をする予定だったボランティアはやはり他人任せだった。そして、私たちはいつものように彼らに対して失望し、イベントを全員でつくっていきたいと思っていた山田は残念ではあるが、彼らとの兼ね合いは難しいと感じるしかなかった。そして森山は不満の矛先にされていたSRK 辻氏に対し、同情するほかなかった。一方、山口は準備に際し、実習中に山田より伝え聞いていた通りに岡田・森山・大西ががんばっていることに対して嬉しく感じずにはいられなかった。だが、彼らのがんばりに報いるために短期間で実習の穴を埋め、情報・経過を頭に入れることは並大抵のことではなく、苦勞した。岡田は、あとは時間が流れるだけで、準備に対する最善の努力をしてきたという自信と、イベントへの希望を心の内に生み出していた。

9月8日。いよいよイベント当日になった。この日私たちは運営にたずさわったわけではなかったが、プラスバンド・熊森協会公演・ファッションショー・ダンスなどが、ボランティア主催で実施される予定で、私たちはそのサポート役にまわるはずだった。朝私たちが会場に行ってみると、前日に設定したはずの照明が、無断で変更されていた。私たちはそれに激しい怒りを覚えた。

プラスバンドの公演時は、多くの人でにぎわい、森山は驚きを隠しきれなかった。そしてそのため、予想以上に作業が増え、必要に迫られていたプラスバンドへの調査が不可能となり、そのことで私たちは危機感を抱き、苛立ちを覚えた。次のプログラムである、熊森協会公演の人の少なさは、大西にとっては哀れみの対象でしかなかった。そしてその時間の他への活用を望んだ。次のファッションショーやダンスもまた、いまいちの出来で、大西は不満や怒りすら覚えた。一方、そのことが大西・森山にとっては、翌日のイベントへの自信につながっていた。

この日の手伝いは、9日の出演者にとっては任意の参加であったが、数人の出演者は快く手伝いに応じてくれた。そのことに、メンバーは感動を覚えた。岡田は、ボランティアの手伝いを数多く行い、恩を売ったと考え、優越感に浸っていた。

この日のプログラムが終了後、翌日の準備を行った。そして、この時準備を自主的にこなす出演者を見て、メンバーはプロジェクトの成功を期待し、喜びに満ち溢れていた。一方、森山はPAのいい加減さに不満を覚えていた。山田は翌日の自分の不参加を残念に思うと同時に、明日の不参加の分、今日補おうとイベントに対する意気込みを見せていた。

9月9日。イベント当日。午前中は出演バンドのリハーサルが行われ、午後はライブの本番であった。メンバーは募集をかけていたゼミ生の手伝いの少なさに落胆し、PAに対してそのいい加減さに憤りを感じた。そして、大西・森山の二人はボランティアの存在を気に留めなかった。この時山口は、イベント運営中に何か事故が起きないかと不安を抱き、同時にイベントを通して、己の要領の悪さに腹立たしさを覚えた。

午前中のリハーサルでは時間が予想以上にかかって押しに押し、山口は苛立ちを感じ、森山は焦りに焦った。その時、大西は二人の焦りを感じ取りつつも、自分の役割をこなすが、もっと自分が上手く立ち回れるのではないのか、という葛藤が付きまとった。一方、森山も時間の押しによる開場・開演時間の延期を独断で下した事に不安を感じていた。

午後からはライブ本番が始まった。メンバーは、本番で出演者たちが自主的に働き、スムーズにイベントが流れて行くことに驚き、安心と感動を覚えた。また、控え室でのバンド同士の交流、演奏中のトラブルをバンド同士で助け合っていることを見て、感激し胸が熱くなった。この時岡田は、出演者らに名指しで呼ばれたことが嬉しかった。また、森山はホールでの演奏による騒音から、ホールの階下の店から苦情がきたことに焦り、結局ボリューム低下を余儀なくされ、出演者に対して申し訳なく感じた。そしてメンバーはあるバンドの演奏中に暴れている客に対して、何かあってはならないと警戒し、不安と苛立ちを覚えるが、演奏終了とともに胸をなでおろした。

本番終了後、森山は撤収のスムーズさに驚き、イベント後の出演者の「いい経験をさせてもらいました。」という一言に感動を感じる。が、イベントが終了したことへのさびしさも少し感じていた。また、SRKとボランティアとの打ち上げで、彼らがこぼした一言から、やはり大人と子どものギャップを感じずにはいられなかった。山口は、イベント終了に際し、今までやった甲斐があったと満足し、達成感を得た。山田は半年間をこのイベントに費やしたにもかかわらず、本番を見ることができなかったことを至極残念に思った。しかし、イベントが成功したことと出演者がかなり自主的に動いたことを聞き、嬉しく思うとともに、自分たちが行ってきたことは無駄ではない、と感じた。大西はイベントが無事終了したことに喜びを感じていた。

16. 9月10日～10月

9月9日が終わって、岡田はイベント成功の達成感と満足感でプロジェクトへの意欲を失った。

9月11日、PIでイベントの反省会を行い、イベント出演者に対する感想シート原案作成した。

大西・森山も岡田同様にイベント成功からプロジェクトへの意欲を失っていた。山田は、イベントのビデオを見て、本番や撤収など全てにおいて成功したことに驚き、嬉しく思った。そして、やはりイベント当日に行きたかったという思いが強まったのであった。

9月15日、岡田が感想シート原案を自宅で編集し、ユーブラにメールで送る。そしてユーブラにて他のメンバーが出演者たちと話をし、感想シートを書いてもらう。また、大西がイベントのビデオをダビングし、出演バンドに贈るため、ユーブラへ持参した。山田は、やはり、岡田・大西・森山と同様にイベントの終了とともにプロジェクトへの意欲を失っていた。

この日、森山はたまたま自分たちに話し掛けてきてくれた出演者たちと、イベントの成功を分かち合えて感動したのであった。

9月18日、イベント後調査の質問回答欄を修正した。しかしこの時森山は調査に対して少しやる気がなかった。

9月24日、市民サミット用ポスターを作成し、山田は改めてイベントの成功を感じ、嬉しく思った。岡田はポスター作成に情熱と意欲を持って挑んだ。また、皆でイベントのビデオを見て、改めて準備や撤収のスムーズさに感動したのであった。

10月、イベント後の調査を行ったが、岡田は、調査や全てに対して意欲を失っていた。

17. 10月23日～11月18日

10月23日、10月28日の予定、バンドの反省会・打ち上げのことを決める。

10月28日、イベント後の打ち上げ兼反省会を行った。また、同時に感想シートと調査を行い、次回予定しているイベントの出欠を聞き、そのためのミーティングを11月18日に予定した。山口は、出演者たちにイベントの感想を聞いて、色々な意見が出てきたことに、彼らが意外と客観的に見ているものだと思う、感心する。メンバーは、打ち上げに集まった出演者の少なさに落胆するとともに、打ち上げの時期が遅かったことに反省したのであった。一方で森山は、次回のイベントについて、出演者が真剣に考え始めてくれたことを嬉しく思った。そしてPAのことを彼ら自身で考えさせ、それによって私たちの後継者となる次回のイベントの参画者の出現を期待するのであった。

ミーティング後、出演者たちの中から自主的にイベントの企画・運営を行いたいという者が現れる。私

たちは最も難関だと思われていた後継者が、自主的に現れてくれたことを嬉しく感じ、PI プロジェクトの成果に達成感と自信を持ったのであった。

その日の夜、後継者の中心である K から森山に電話があり、二者は熱い会話を交わした。この時森山は、K がイベントを自分たちで行う、と電話してくれたことに対し、胸が熱くなった。また、その話の中で、やりたかったことが自分たちと同じであることを嬉しく思った。そして K に対する信頼と、彼らにイベントを任すことへの安心感を覚えたのであった。

10月30日。Kらと次のイベントについて理念を話し合う。まず、山口は彼らの頭の回転の良さに舌を巻いた。森山は、PIのメンバーにKたちのやる気を聞いてほしいと考えていた。また、Kらに直接会い、電話での情熱が本物だと分かり、嬉しく感じた。同時に、Kらに今後の運営は任せるが必要な時はいつでも助力する気持ちが自分たちにある、と彼らに感じて欲しかった。そして、これからは運営をKらに任せ、私たちの仕事は彼らのモチベーションを保つことだ、と考えた。

11月8日。ユープラにてKらのミーティングに参加する。フライヤーのことを聞き、ダンス部門の出演者を勧誘する。私たちはとめどなく進むKらの企画力に圧倒され、運営委員に新しく参加した女の子の強さに驚くとともに安心したのだった。そして、いい人材が集まったと感じて喜び、これからは期待を持つ。が、一方で彼らのイベントなので口をはさみそうになるのを、グッと堪えたのだった。

11月13日。Kらのミーティングに参加。ダンス部門の出演者をつながりを持つ。森山は再び、彼らの想像力の豊かさに驚き、口出しすることを我慢する。

11月18日。Kらによる第1回企画・運営ミーティングに参加する。そこで、今回のイベント代表者が誰であるかを、前回の代表者であった森山が宣言・明確にし、彼らの力を保証した。山田は、このことは彼らにとって大きな意味を持つのではないかと考えた。また、人前で話すことの難しさを感じている彼らとかつての私たちが重なり、助けたくなるのであった。森山はそんな彼らに不安を感じ、Kらに運営は任せても、必要なときはいつでも私たちが助力しようと再び思った。その思いが功を奏してか頼ってくる彼らを見捨てず、思わずミーティングに多くの部分で関わり、助けてしまったのだった。

その後、次回イベントについてKらと話をし、私たちは彼らを頼もしく思い、イベントの成功を期待するのであった。

このイベントは「ユース・カルチャー・マーケット 02」と名づけられ、彼らの企画の下、2月9日に開催されることとなった。

5. 集計・分析

5-1. 活動に際する対象・感情と時間のコレスポンド分析

私たちの活動を考察するに際して「PI 活動日記」をもとにした。まず、活動中に起こった感情とその対象を抜き出した。それらを KJ 法によって感情を 25, 対象を 13 にまとめ上げた。また日数に関しては、全日数を 17 の期間に分けた。この期間（時間）と感情・対象をクロス集計するために、17 の期間を行、対象・感情を列に配し 1 つの表にまとめた。本論文への掲載にあたって行・列を入れ替えてある。（図 A-1）

さらにそこから時間と感情・対象についてコレスポンド分析を行い、2 者間の相関関係を示すグラフ（図 A-2）を作成した。この 2 つをもとに、私たちの一連の活動を考察し、またその時間の経過を追うことによって、感情と対象がどのように移り変わっていくのかを見ていくことにした。

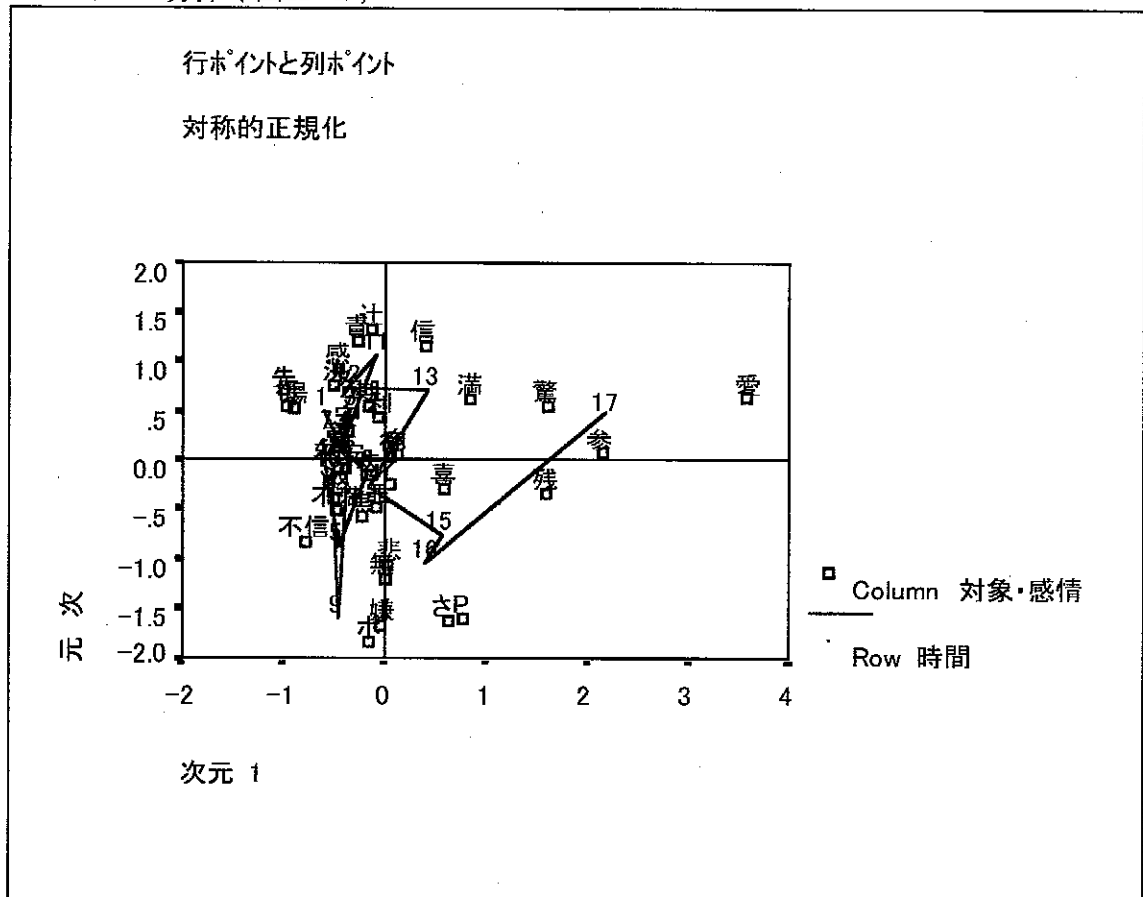
対象・感情と時間のクロス集計表 (図 A-1)

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
		1月	2月	3月	4月	4/30~5/3	5/4~5/24	5/28~6/15	6/16~22	7/2~7/前半	7/11~28	7/30~8/4	8/7~10	8/15~22	8/23~8月末	9/10~9/9	9/10~10月	10/28~11/18
対象	1 ユーブラ 場所																	
	2 ユーブラ 利用者																	
	3 プロジェクト	14	29	4														
	4 SRK(辻氏以外)																	
	5 先生			1	1	1												
	6 行政					2												
	7 辻氏(SRK)																	
	8 自分(たち)	8	6	5	8	5	1	4	1	2								
	9 PIメンバー	4		2	3	4	4	4	1									
	10 ボランティア		1		1	7												
	11 イベント		7	1	4	1	9	4	2									
	12 P A																	
	13 イベント出演者																	
感情	1 期待			10	2	1	2	2	3									
	2 意気込み	3		10	1	3	3	5	5	2	1							
	3 不満	6		11	3	3	6	3										
	4 後悔	1		4		3		1	2									
	5 不安			2		9	1	3	3									
	6 安心	2	1			1		2	2									
	7 怒り		1			2			4	1								
	8 不信																	
	9 失望	1	1															
	10 決起				1	1	1		1	1								
	11 責任感																	
	12 感謝						1											
	13 信頼	3	1			1				1	1							
	14 焦り		1	1						1	3							
	15 嫌悪			1														
	16 満足			1	1					1								
	17 自信	2	1	1	1	1	1											
	18 喜び	3	10	3	1	3	3	3	3	1								
	19 罪悪感																	
	20 悲しさ																	
	21 さびしさ																	
	22 残念感																	
	23 無関心			1		1	1	1	1	1								
	24 驚き	1	1	1					1									
	25 愛着																	

図 A-1 の色分け

■	カテゴリー(行)で得点が1位		
■	カテゴリー(行)で得点が2位		
赤字	期間(列)で得点が1位		
青字	期間(列)で得点が2位		
	0得点が2期以内のカテゴリー		
	対象:人・組織	感情: プラス・喜・楽	
	対象:プロジェクトおよびイベント関係	感情: マイナス・怒・哀	

コレスポンデンス分析 (図 A-2)



対象・感情のマークは以下の通りである。

「対象」 ユープラ 場所 … 場
ユープラ 利用者 … 利
プロジェクト … プ
SRK (辻氏以外) … S
先生 … 先
行政 … 行
辻氏 … 辻
自分 (たち) … 分
PI メンバー … メ
ボランティア … ボ
イベント … イ
PA … P
イベント出演者 … 参

「感情」 期待 … 期
意気込み … 意
不満 … 不満
後悔 … 後
不安 … 不安
安心 … 安
怒り … 怒
不信 … 不信
失望 … 失
決起 … 決
責任感 … 責
感謝 … 感
信頼 … 信

焦り … 焦
嫌悪 … 嫌
満足 … 満
自信 … 自
喜び … 喜
罪悪感 … 罪
悲しさ … 悲
さびしさ … さ
残念間 … 残
無関心 … 無
驚き … 驚
愛着 … 愛

5-2. 企画運営チェックリストとコレスポネンズ分析からの分析

また、住民参加型事業運営マニュアルを用いて、1つの企画・運営チェックリストを作成した。同時に「PI活動日記」から重要と思われる活動を抜き出し、年表にした。(図A-3)この2つから私たちが行ってきた各行動がそのチェックリストのどの項目に相当するかを調べた。

それらを前章のコレスポネンズ分析(図A-1, A-2)とともに、それぞれの活動を分析してみた。

以下はそのチェックリストである。大見出しが12、全部で42のチェック項目を設けてある。各項目の右に付してある数字は、活動年表(図A-3)で日付順に付した番号である。

① 活動理念の明確化

1. 何故その事業をおこすのか。 1, 92
2. 事業の成果を考える。(効果) 1, 23, 25, 29, 30, 81, 92
3. 事業の継続性を考える。 1, 8, 23, 83, 84, 85, 87, 88, 89, 90, 93

チェックリスト項目1・2・3に関しては、活動当初であった1・2月と活動終盤であるイベント終了後の9・10・11月に該当する。

実際に、12月～1月前半にかけて、私たちは理念についてじっくり話し合った。またイベント終了後には、理念の再確認・次回イベント・その企画運営者を考えるという作業を行っている。そして次のイベントの企画運営者が見つかった。

コレスポネンズ分析からは、期間1・2と期間16・17が該当する。期間1・2では「プロジェクト」、また期間16・17では「プロジェクト」と「イベント出演者」という対象に意識が向いていることが分かる。感情に関しては、期間1・2で「期待」「意気込み」「喜び」「不安」などが存在し、期間16・17では「喜び」「驚き」「愛着」「信頼」などが起こっている。

② 支援者(行政・SRK・近隣施設)

4. 事業への支援者は誰かを考える。 2, 5
5. 支援者はどのようなことを望んでいるかを考える。(関心事) 3, 7
6. 支援者をどのようにして発掘、確保するのかを考える。 2, 18
7. 支援者に何を期待するのかを考える。 2, 3, 4, 8, 12, 18, 39

チェックリスト項目4～7に関しては、1～3月に該当する。この頃実際に、私たちは資金、場所、機会、情報を確保するための行動を行っている。また、支援者を行政とSRKに決め、彼らと直接接することによって、お互いの情報を交換した。

コレスポネンズ分析からは、期間1・2・3が該当する。ここでは期間1から2へ移行するとともに、対象も「行政」から「SRK(社氏以外)」へと移行し、また「ユースプラザ 場所」にも関心が向いていることが分かる。感情に関しては、期間1・2で「不安」「不満」「意気込み」が存在し、期間3では「喜び」が起こっている。また「期待」においては、期間1～3を通して存在する。

③ 資金

8. 事業の実施にあたって、どれぐらいの資金が必要かを考える。 21
9. 資金の調達はどうに行うかについて考える。 2, 8, 12, 19
10. 資金が不足する場合はどうするのかについて考える。

チェックリスト項目 8~10 に関しては、1~4 月に該当する。実際に 1 月に企画書を作成し、資金を確保するための支援者へのプレゼンテーションを行った。しかし、3 月 5 日にすでにイベントを行うための資金は存在することを SRK から伺った。

コレスポンド分析からは、期間 1~4 が該当する。②支援者と同じく、「行政」から「SRK (辻氏以外)」へと対象が移行している。また、期間 2 以降、「イベント」という対象が増えていることも分かる。感情に関しては、②と同様に、期間 1・2 で「不安」「不満」「意気込み」が存在し、期間 3 では「喜び」が起こっている。また「期待」においては、期間 1~3 を通して存在する。

④ 行政からの事業の受託

11. 従来からの事業の継続であるかどうかを調べる。 8
12. 事業の背景を調べる。 8
13. 制約条件を調べる。 8
14. 事業として何をおこなうのか。 8
15. 当面の期間で達成可能な目標を設定する。 8

チェックリスト項目 11~15 に関しては、2 月 18 日に行われている。この日、SRK からユープラ 1 周年記念イベントについての話を伺った。

コレスポンド分析からは、期間 2 が該当する。ここでは「プロジェクト」「イベント」という対象に、「意気込み」「喜び」「期待」、逆に「不満」という感情を抱いていたことが分かる。

⑤ 組織体制

16. 事業実施にあたって、どのような組織をつくりたいのかを考える。(構成員の明確化) 6, 10, 24
17. 組織内での人々の役割を考える。(役割の明確化)
7, 15, 16, 20, 24, 32, 41, 44, 45, 59, 67, 72, 76, 77

チェックリスト項目 16 に関しては、2 月と 5 月 8 日が該当している。チェックリスト項目 17 に関しては、2 月から始まり、9 月まではほぼまんべんなくチェックされている。

コレスポンド分析からは、チェックリスト項目 16 は期間 5~10 に該当する。そこでは、「ボランティア」の数字が伸びていることが分かる。また常に得点を出している対象のカテゴリー（プロジェクト・イベントなど）を除くと「SRK (辻氏以外)」の得点がこの時期に分散している。

チェックリスト項目 17 は期間 2~15 が該当する。そこでは組織に関する項目である「SRK (辻氏以外)」から「辻氏 (SRK)」へ、そして「ボランティア」と「イベント出演者」という対象へと意識が向いている。

感情としては、期間 5~10 は期間 2~15 の内にあるため、次にまとめて列挙した。まず「期待」「意気込み」「不満」から「不安」へ、「安心」「怒り」「失望」「決起」そして徐々に「感謝」「信頼」が高まる。イベント直前からイベント当日にかけて「焦り」「嫌悪」「満足」「自信」「喜び」という感情を拾うことができる。

⑥ 観客（地域住民・青少年）を考える

18. 顧客はどのようなニーズを持っているかを調べる。 9, 14, 17
19. 顧客は明確に規定し、選別できるかマーケティングを行う。 35
20. 観客は何人ぐらいを見込んでいるのか考える。 38, 42
21. どのようにして観客を集めるのか。（広報方法） 11, 27, 35, 39, 43

チェックリスト項目 18 に関しては、2～4 月が該当する。実際にユープラ内でのニーズ調査を計画し行った。チェックリスト項目 19～21 に関しては、3 月～7 月に該当する。この期間に、イベント広報について考えていた。

コレスポネンズ分析から、チェックリスト項目 18 に相当する行動は期間 2～4 に該当する。この期間では「プロジェクト」「イベント」という対象に関心が向けられている。そして期間 4 では「不安」「焦り」という感情が起こっていることが分かる。

また項目 19～21 に相当する行動は、期間 3～9 に該当する。そこでは「プロジェクト」「イベント」に対する関心が常に高い。感情では、特に目立った数字がないという特徴がある。

⑦ 事業参画者

22. 事業への参画者は誰かを考える。 1, 8, 33
23. 参画者はどのような基準で選ぶのか考える。 26, 33, 46
24. 参画者はどのようにして確保するのかを考える。（出演者募集方法） 26, 33, 36
25. 何人ぐらいの参画者を見込むのか考える。 46
26. 参画者の具体的な参加方法を考える。 47, 59, 67, 78, 80, 86

チェックリスト項目 22 に関しては、1・2 月と 5 月が該当する。つまり 1・2 月で①の理念や②の支援者を通して④の行政からの受託を経て、5 月の募集にたどり着いたと伺える。チェックリスト項目 23～25 は、5 月～7 月に該当する。そこでは、実際にバンドの申し込み書を作成・募集を開始し、選考を行っている。チェックリスト項目 26 は、8～10 月にあたり、そこでは実際に参画者が決まった。そのことを踏まえてイベントまでの準備を彼らと行った。つまり「出演者ミーティング」を行い、パンフレットやホール設営の役割分担・当日の裏方仕事など、ライブ以外で彼らのイベントに対する関わり方も考えていた。

コレスポネンズ分析からは、期間 6～10 が該当する。それらの期間では、「イベント出演者」よりも、「イベント」そのものへの関心が高いことが分かる。また期間 11～17 がチェックリスト項目 26 でチェックの入った期間と一致するが、その期間では、「イベント」そのものと、「イベント出演者」に意識の対象が向いていたことが分かる。感情では、期間 6～9 であまり見られていない「安心」が期間 10 では高得点を示している。同様のことが、期間 11～17 でも「愛着」「喜び」のカテゴリーで起こっている。

⑧ 参画者の参加方法を具体的に考える

27. 参画者のニーズをどのようにしてくみ取るかを考える。
52, 53, 58, 61, 63, 68, 70, 81, 86, 87, 89, 91
28. 内容を考える。 49, 53, 58, 65, 73, 84
29. ねらいを考える。 49, 53, 58, 65, 73, 84
30. 進め方を考える。 49, 53, 58, 65, 73, 84
31. ふさわしいルームアレンジメントを考える。 51, 54, 57, 60, 66, 74, 85
32. 配布する書面のフォーマットについて考える。 49, 53, 58, 65, 73, 84
33. 参加者同士のコミュニケーションを図る。 55, 62, 68, 75, 78, 79, 80, 81, 84, 85

チェックリスト項目 28~30 と 32 に関しては、7 月 28 日と 8 月・10 月が該当する。つまりこれは出演者ミーティングの準備のために、私たちが参画者の具体的な参加方法を考えた日である。そしてチェックリスト項目 31・33 が参画者と実際に関わった日であり、チェックリスト項目 27 はそれら両方に該当する。

コレスポネンズ分析から、ここでは期間 10~17 までが該当する。⑦事業参画者と同様に、「イベント出演者」に関心が高いことが分かる。また「自分（たち）」「PI メンバー」「イベント」も得点が高かったことが見てとれる。感情では、期間 11 から「信頼」「責任」「感謝」「意気込み」が高得点である。

⑨ 日程

34. 事業開催日はいつ、どのぐらいの期間行うのかについて考える。 1, 8, 25

35. 開催日までの事業スケジュールを確認する。

13, 22, 28, 31, 34, 37, 48, 52, 64, 67, 71, 72, 73, 77, 78

チェックリスト項目 34 に関しては、①理念 ④行政からの事業受託 と同様の期間に該当し、5 月 13 日に実際の開催日が決定している。チェックリスト項目 35 は、項目 34 を踏まえて、3 月からイベント前々日まで一貫して行っている。

コレスポネンズ分析からは、期間 2~15 までほぼ一貫して「イベント」に対して意識が向いていたことが分かる。また感情においては、「意気込み」がイベント直前の期間 15 まで常に抱いていた感情である。

⑩ 実現性

36. 自らが得意とするものを効果的に活用できているか。 1, 5, 59, 81

37. 実現の可能性は高いか、無理はしていないか。 5

チェックリスト項目 36 に関しては、1 月・2 月 18 日・8 月 10 日・9 月 9 日が該当する。

チェックリスト項目 37 に関しては、2 月 18 日が該当し、この日に SRK からイベントの具体的な話を聞き、イベント開催への確かな足がかりを見つけた日であったためにチェックがはいったのである。

コレスポネンズ分析からは、⑨日程でも述べたように一貫して「イベント」に注目し、それに対する「意気込み」が示されている。

⑪ 活動中のある時点での振り返り

38. 活動に対する反省をする。 58, 82, 83, 85

39. 組織外部からの評価を受ける。

チェックリスト項目 38 は、8 月 10 日・9 月 11 日・9 月 15 日・10 月 28 日が該当する。

チェックリスト項目 39 は、チェックがなく、私たちの活動の中では行っていない。

コレスポネンズ分析からは、期間 12・16~17 で「イベント」「PI メンバー」「イベント出演者」に対する「意気込み」「決起」「自信」「信頼」「責任感」などの感情が挙げられる。

⑫ 中間支援としての役割を考える

40. 支援者と参加者の間での必要なコミュニケーションの仕方を検討する。 88, 91, 93

41. 支援者への報告を考える。 40, 50, 76

42. 参加者とのコミュニケーションを考える。

41, 44, 45, 49, 51, 53, 56, 58, 61, 63, 66, 69, 70, 72, 74, 77, 78, 79, 80, 81, 83, 85

チェックリスト項目 40 は, 11 月が該当する。

チェックリスト項目 41 は, 7 月 4 日・7 月 30 日・9 月 4 日である。

チェックリスト項目 42 は, 7 月～10 月までの期間が該当する。

チェックリスト項目 40 の期間に対応するコレスポネンズ分析の期間 17 では、「イベント出演者」という対象の得点が特に高いことがわかる。この期間の感情としては「信頼」「喜び」「驚き」「愛着」といったカテゴリーが挙げられる。チェックリスト項目 41 に関しては、期間ではないため挙げることはできない。チェックリスト項目 42 は期間 9～17 が該当し、「行政」「社氏 (SRK)」「自分 (たち)」「PI メンバー」「ボランティア」「イベント」「イベント出演者」へと対象が移っている。感情に関しては、「安心」「怒り」「決起」「感謝」「信頼」「焦り」「嫌悪」「自信」「喜び」「無関心」「驚き」「愛着」という変遷がある。

活動年表（図A-3）

月	日	番号	活動内容	項目番号
11月～1月前半		1	理念を話し合う	1, 2, 22, 34, 3, 36
1月	第3週	2	企画書を作る	4, 6, 7, 9
	25日	3	市役所に企画書を提出しに行く	5, 7
		4	市役所の後に初めてユープラに行く	7
2月		5	佐野氏・南平氏とミーティング	4, 36, 37
	18日	6	佐野氏・南平氏にユープラに入るために、私たちの自己紹介するよう伝えられる。	16
		7	SRKの方にPIがイベントの企画運営にまわることを勧められる	5, 17
		8	佐野氏・南平氏から1周年記念イベントがあることを聞いた	3, 7, 9, 11, 12, 13, 14, 15, 22, 34
	21日	9	イベントニーズ調査実施を決定	18
		10	ボランティアさんとの親睦を図る必要性を感じる	16
3月	5日	11	イベント広告で市の広報への投稿許可を頂く	21
		12	ユープラから助成金を申請できることを知る	7, 9
	11日	13	イベントまでの大まかなタイムスケジュール作成	35
	12日	14	ニーズ調査開始	18
		15	ニーズ調査隊ポスターをユープラに掲示する	17
4月	1日	16	ボランティア作戦がはじまる。ボランティアに入ろうとする	17
		17	ニーズ調査の集まりが悪い。次の策を考える	18
	12日	18	PIがユープラ主催でイベント運営することを伝える	6, 7
		19	助成金についての話を伺う	9
	14日	20	ボランティア会議・PI自己紹介をする	17
	23日	21	見積もりのしなおし、企画書の補足をする	8
		22	タイムスケジュール、必要事項を明瞭化のため掲示板にアップする	35
	30日	23	イベントの成功は何かについて話し合う	2, 3
5月	8日	24	イベント本格的参加を表明する	16, 17
	13日	25	イベントの予定準備事項について考える・イベント構想について話し合う	2, 34
		26	バンド申込書を作る	23, 24
	19日	27	ポスター・チラシについて考える	21
		28	全体・当日のスケジュールを考える	35
	21日	29	イベントに参加するメリットを考える	2
	24日	30	イベントの効果について考える	2
		31	詳しいタイムスケジュールを作成する	35
	31日	32	イベントの担当を決める	17
		33	イベント出演者募集開始	22, 23, 24
6月		34	タイムテーブル考え直す	35
	16日	35	チラシを学校に持っていけるか調べなくてははいけないと考える	19, 21
	17日	36	出演者募集方法の再検討	24
		37	細かいタイムスケジュールを考える	35
	20日	38	ポスター・チラシの部数について考える	20

7月	2日	39	高校へのチラシ配布については行政の許可必要だと知る。	7, 21
	4日	40	辻氏から行政への中間報告を勧められる	41
		41	チラシに関してボランティアから修正の要望が来る	17, 42
	8日	42	チラシ・ポスター部数を考える	20
		43	イベントの事が神戸の区民版に載る	21
		44	辻氏から言われ、9月8日のこともチラシに載せる	17, 42
	17日	45	イベント部会とのミーティング	17, 42
	22日	46	出演バンド選考する	23, 25
		47	7月30日に出演バンドを集める事に決める	26
		48	これからのタイムスケジュールを決める	35
	28日	49	7月30日のミーティングの内容、タイムスケジュールについて話し合う	28, 29, 30, 32, 42
	30日	50	辻氏・井上氏とミーティング	41
		51	出演者ミーティングで顔合わせ、自己紹介をする	31, 42
		52	リハのことなど詳しく参加バンドと話す	27, 35
8月	2日	53	第2回ミーティング内容を検討する	27, 28, 29, 30, 32, 42
	7日	54	第2回出演者ミーティング	31
		55	バンドにアイズブレイクをする	33
		56	出演バンドと個別に話をする	42
		57	出演者にホールを見せる	31
	10日	58	第2回ミーティングの反省・第3回出演者ミーティング内容を検討する	27, 28, 29, 30, 32, 38, 42
		59	イベント仕事をホールとパンプに分けることに決定	26, 17, 36
	15日	60	第3回出演者ミーティング	31
		61	バンドと個別に話をする	27, 42
		62	ホール担当は図を配り、自分たちでホールの中の仕組みを見て考える	33
		63	ホールの内装についてバンド出演者と話し合う	27, 42
	17日	64	イベント当日の流れについて話し合う	35
	20日	65	第4回出演者ミーティングの内容を検討する	28, 29, 30, 32
	23日	66	第4回出演者ミーティング	31, 42
		67	イベント当日の進行がほぼ決定する・シフト表作成	17, 26, 35
		68	出演順を出演者自らで決める	27, 33
		69	パンフレットの印刷を出演者で行う	42
	27日	70	出演バンド・PA・PIでミーティング	27, 42
		71	シフト表完成	35
	28日	72	イベント部会とのミーティング	17, 35, 42
		73	第5回出演者ミーティングの内容を検討する	28, 29, 30, 32, 35
9月	2日	74	第5回出演者ミーティング	31, 42
		75	パンフレットの製本作業を出演者皆で行う	33
	4日	76	ボランティア会議	17, 41
	6日	77	イベント部会とミーティング	17, 35, 42
	7日	78	出演者ととともにホール設営・バンドに最終確認	26, 33, 35, 42
	8日	79	イベント手伝い	42, 33
		80	8日イベント終了後、出演者と共に最後の会場設営	26, 42, 33
	9日	81	リハーサル及び本番ライブ	2, 27, 33, 36, 42

10月	11日	82	ライブイベントの反省会	38
	15日	83	出演者の子ども達と話をする・感想シートを書く	3, 38, 42
	23日	84	バンド反省会で話合うことを決める	3, 28, 29, 30, 32, 33
	28日	85	出演バンドとの反省会・イベントの感想を述べてもらう	3, 31, 33, 38, 42
		86	次回イベントの後継者が決まる	26, 27
11月	30日	87	次回イベントについて新メンバーが理念を語る	3, 27
	6日	88	新メンバーと話し合い	3, 40
	8日	89	フライヤーの内容検討、ダンスの勧誘をする	3, 27
	13日	90	新メンバーのミーティングに参加・ダンスの子とつながる	3
		91	新メンバー次回ミーティングの内容を検討する	40, 27
		92	新メンバーによる、次回イベントの内容を聞く	1, 2
	18日	93	新メンバーの第一回企画運営ミーティング・後継者が誰かを発表する	3, 40

6. 考察・評価

5. 集計・分析 で扱ったチェックリストを軸に、コレスポンド分析とともに考察を行う。また実際のアクションを中間支援という視点から評価する。

① 活動理念の明確化

活動当初に活動理念を明確にすることは、事業主としてイベントの一貫性を保つために有効であった。また、イベントの方針をはっきりさせることで、参加者に共通の目的意識（イベント主旨）を与え、そのことによって、その後の具体的な行動ひとつひとつの意義が明確になった。この時期に「期待」「意気込み」「喜び」「不安」といった感情が入り乱れ、「プロジェクト」に関心が向いているというコレスポンド分析は、試行錯誤しながらもそれらを行っていたということ表している。

また活動終盤で、その理念を再確認したということは、このイベントが一貫性を持っていたという証明である。そして、イベントが一貫性を持っていたということは、「プロジェクト」の成功の確かな証拠であり、「プロジェクト」に対する「喜び」がコレスポンド分析に現れるのは当然である。また当初の私たちの理念の1つであった「イベント出演者」の主体的参加は、イベントの成功とともに達成され、そのことに「喜び」「驚き」などを感じたことは、彼らの中から出てきた次のイベント・その企画運営者への「愛着」「信頼」などに大きくつながり、それらが次のイベントへの確かな礎となったことは間違いないと言えるだろう。

② 支援者（行政・SRK・近隣施設）

③ 資金

④ 行政からの事業の受託

⑥ 観客（地域住民・青少年）を考える

私たちは実際に「イベント」を行う上でまず、資金、場所が必要だと考えた。次にそれらの獲得方法として、外部からの支援という手段に頼るにいたった。そして支援者の具体的確保に活動を移した。そこで私たちは行政にその対象をしばり、①で明確にした活動理念をもとに企画書を作成し、プレゼンテーションを行った。そこから、ユープラ（ユースプラザKOBÉ・WEST）を紹介してもらい、直接ユープラ責任者であるSRKと話をした。そこでユープラの責任者であるSRKと私たちが互いの活動理念を説明し合い、そのうえで1周年記念イベントの企画運営を勧められた。このイベントをもとに私たちの企画は、実現へと大きく動いた。そして彼らからこのイベントの背景・制約を聞き、すでに政府からの「子育て支援基金」により、このイベントへの助成金が出ていることが分かった。

私たちのこの一連の活動をコレスポンド分析から言うと、意識の対象が「行政」から「SRK（社以外）」へ移行しているのは、私たちの支援者の対象がそれに移行したことを意味している。活動始動当初に「不安」「不満」「意気込み」「期待」などを感じていたのは、事業主としてイベント運営に必要なものを獲得していないことを表し、その後それらの感情が「喜び」に変化したということはそれらを手に入れることができたことを表している。

これらの一連の活動はイベントに必要なもの（場所・機会・資金・情報）を手に入れるための行動であり、イベント運営者が実際に事業を行うにあたって、それらを手に入れることは最初に出会う課題の1つだと言える。私たちの場合、場所・資金に関しては行政の「青少年（中高生）の居場所づくり推進事業」にのっとったSRKの指針と私たちの理念が一致し、その上で私たちが彼らの1周年記念イベントの企画運営への誘いに乗ることで、比較的容易に手に入れることができた。また、その支援者と互いの意見を交換し、理念が一致したということは、私たちと彼らはその後事業を進めていく際の協働・連携する「パートナー」になったことを意味し、それはこの活動の中でも大きな収穫であった。

しかし、難なく場所と資金を獲得できたということは、運営者の課題を完全に達成していないというこ

との1つの証明であった。それは自分たちが運営者であると認識する作業がそこではできなかったと同時に、私たちが事業に関する責任を自覚していなかった証明でもある。また、支援者－運営者というような立場の明確化をすることにも意識が向いていなかった。

この自覚のなさや立場の不明確さは、その後、組織を構成する際（⑤組織体制にて記述）の大きな障害となり、そのことは予算の配分・利用方法に関して深く踏み込むことができないというさらなる弊害も呼び起こしてしまったのである。

また、イベントには「ヒト」も必要である。出演者に関しては⑦事業参画者で記述する。ここでは、それ以外の人々、観客である地域住民について考察してみる。

そもそも、このイベントには地域住民の主体的参加が必須課題であった。そのためには彼らのニーズをより多く拾いあげることが必要である。私たちは実際にイベント企画時にニーズ調査を行ったが、その成果に関しては疑問が残る。なぜなら私たちはその調査を、地域住民のニーズを拾うために行ったのではなく、イベント出演者確保のための手段として行ったからである。つまりイベント開催および出演者確保においては、このニーズ調査は一役買ったと言えるのだが、地域住民のニーズを拾うという本来の役目に関しては全く機能していなかった。

実際、私たちが行ったニーズ調査は、ユースプラザを利用している青少年を対象に、イベント開催に関する賛否を問うていた。しかし、本来のあるべき形としてはユースプラザ近隣の地域全域に範囲と対象を広げた上で、その賛否を問うべきだった。一方で、広報に関しては地域住民を対象にしていたことが伺える。実際イベント当日には数多く地域からの鑑賞者が得られたのだが、それは情報誌への掲載・チラシ配布などの広報活動の際に地域を視野に入れていたということが要因となって生まれた成果だと言える。

以上のことから、イベント集客数において、予想以上の結果を出した今回のイベントは、単なるイベントとしては成功を収めたと言えるだろう。しかし、もし今回のイベントが地域住民のニーズをふまえた上で成り立ち、イベント後に彼らから評価を得るという過程を通過していたとすれば、それは「地域イベント」として真に成功したと言えたのではないだろうか。

⑤ 組織体制

ここにある各チェックリスト項目は組織のあり方と、その大きな組織内での各小組織の役割について考えていたかどうかの項目である。チェックが入っている日付はそれぞれ、このことに私たちの意識が向いていたかどうかを表している。

イベントというひとつの事業を行うに際し、組織の明確化というのは大きな課題のひとつである。実際に私たちは「行政」から始まり、ユープラ1周年記念イベントという組織の中で「SRK（辻氏以外）」そして「ボランティア」と関わることとなった。またイベントの開催に近づくに連れ「イベント出演者」とも関わることとなった。

ここでチェックリスト項目17を見てみると、2月から9月まで、ほぼまんべんなくチェックされている。このことから、毎月行われているボランティア会議・7月からイベント直前まで行われた出演者ミーティング・イベント部会とのミーティング・SRKとの調整といったユープラ1周年記念イベントという組織の中で、私たちPIのあり方を長期にわたり意識していたということが言える。

また、コレスポネンズ分析からも次のことが言える。期間5～10で「ボランティア」「SRK（辻氏以外）」という対象が分散していることは、この時期がまさにユープラ1周年記念イベントにおける組織への関心の萌芽期であることを示している。そして期間9～15で「ボランティア」および「辻氏（SRK）」という対象に注目している。この時期に実際のイベント運営のために必要な組織のあり方を考えていたことが分かる。期間11から始まる「イベント出演者」という対象の現れは、組織内の役割が具体化していったことを如実に表している。ただ、ボランティア会議に合わせて起こる「不信」「失望」「嫌悪」といった感情から、実際に私たちがどれほどボランティアと関わることをできたかを計るのは早計であり、以下の考察から検証したい。

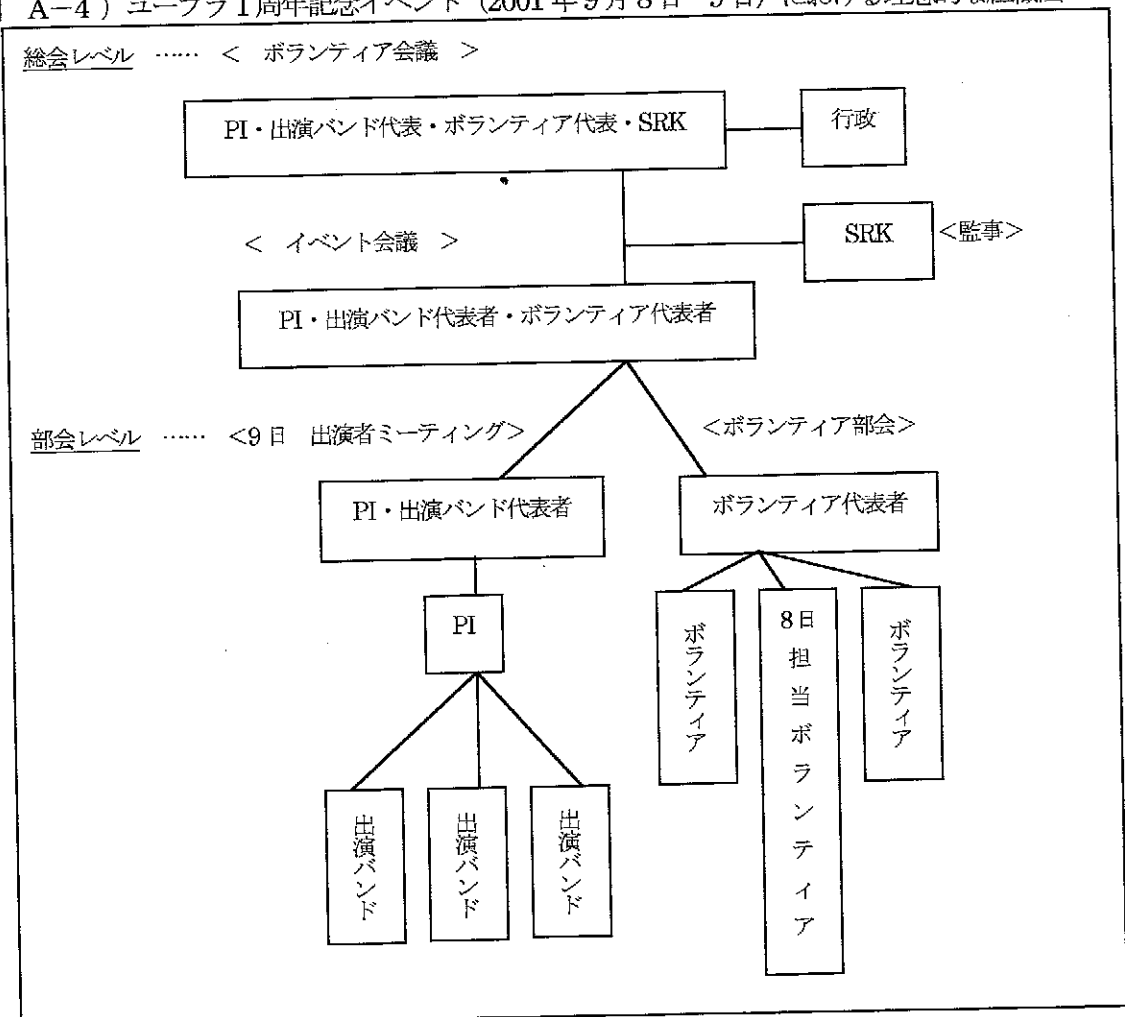
ここで述べたユープラ1周年記念イベントにおける組織とは、次のような組織図として図式化することができる。参画者の意見を拾う部会レベル（出演者ミーティング、PI・出演者代表）、ボランティア部会レベル（ボランティア代表）、その2部会をつなぐSRKがあり、その上部組織として総会レベルのユープラ・ボランティア会議があるという図式である。（図 A-4）ただしこの組織図は理想図であり、実際に

は出演者の代表として PI が総会レベルであるボランティア会議に出席していた。そのため出演者の意見からイベントを実現させていくという PI の役割は果たしていたものの、出演者とボランティア・SRK との間に強い関係を結ぶことが出来なかった。それはおろか、私たちとボランティアの間にも強い関係を結ぶことができなかった。何故ならば私たちはボランティアとの間に SRK が介在する形でしか関わることをしなかったからである。

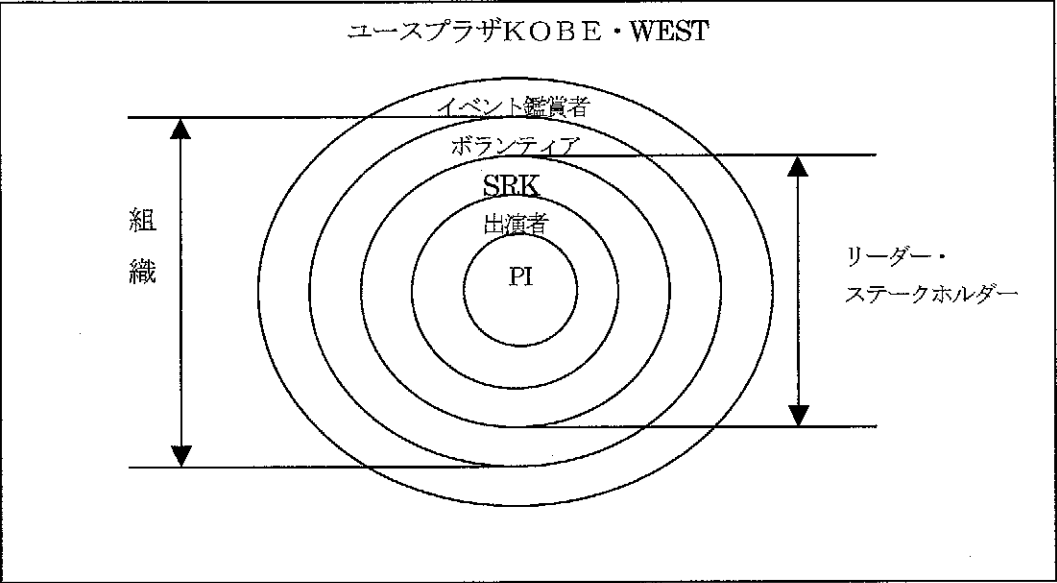
今回、私たちは中間支援を目的に活動を行ったのであるが、イベントの開催に向けてはそのイベントのステーク・ホルダーの存在も常に意識していた。つまりロール・テakingからロール・メイキングに参画者の意識を向かせるということである。これらを具体的にユープラ内の各組織に置き換え、同心円図で表したものが(図 A-5)である。この図で着目すべきはボランティアが出演者の外に配置されていることである。本来ならば出演者とボランティアは同じ円の中にあり同じ扱いをされるべきである。また組織の範囲をボランティアに止めてあるが、実際にはステーク・ホルダーの範囲が組織の範囲と同等であり、イベントを行う運営組織としてはボランティアを範囲に入れることが不可能であった。これらの点から私たちの組織への関わり方の甘さを浮き彫りにすることが出来る。また中心に私たち PI を置き、SRK をその外円に位置させてあるが、実際は不明確であった。というのも、イベントそのものの責任者として私たちは任されていたにも関わらず、SRK を支援者そしてユープラの監事としておくことができず、互いが責任者であるという曖昧さを残したまま活動を行ったからである。なお、この図においてイベント支援者である SRK とイベント参画者である出演者までをステーク・ホルダーとしてあるのは、次回開催される「ユース・カルチャー・マーケット 02」において、その 2 者が実際のイベントの運営者となったからである。

この一連の流れから、出演者と支援者である SRK に対し、私たちが中間支援として行った活動の成果のひとつと言える図を以下に掲載しておく。(図 A-6)

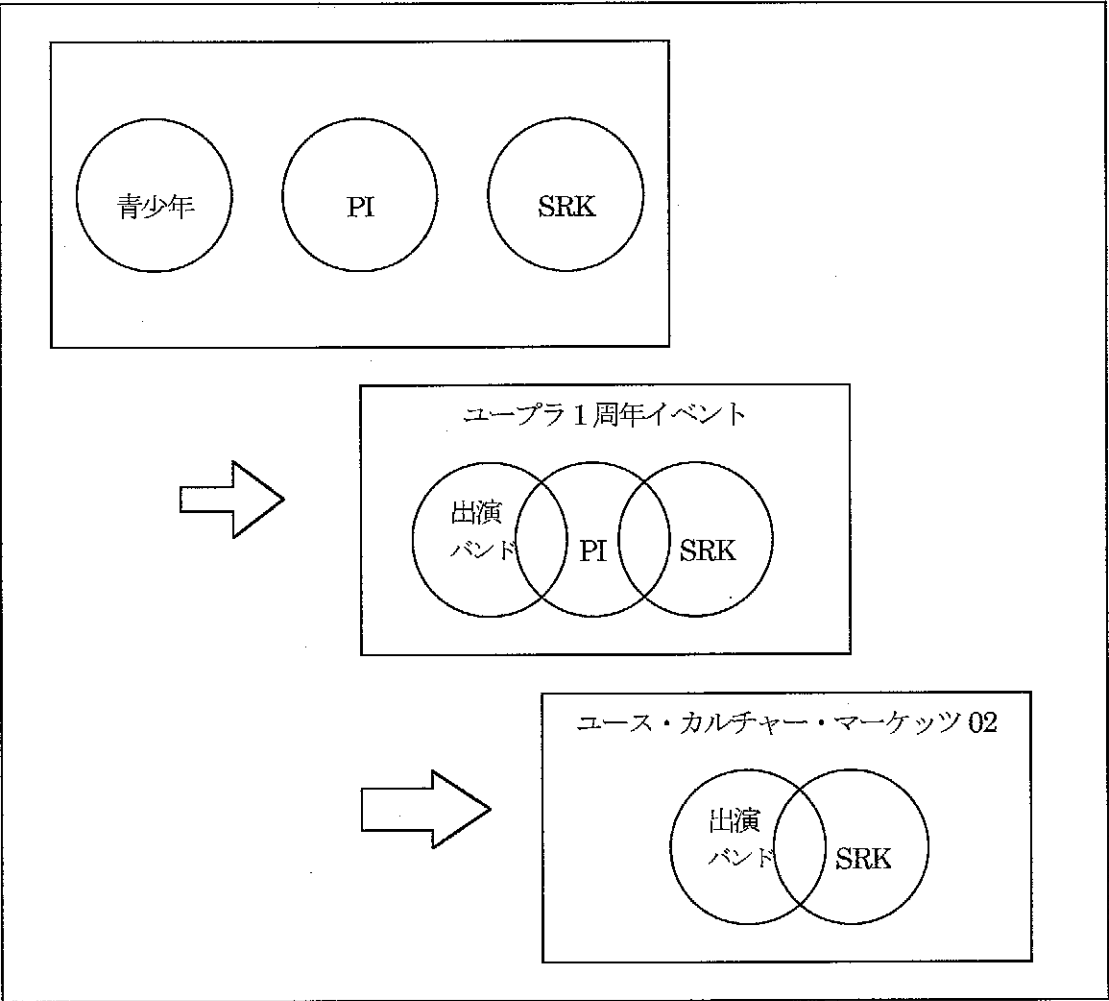
(図 A-4) ユープラ 1 周年記念イベント (2001 年 9 月 8 日・9 日) における理想的な組織図



(図 A-5) ユープラ1周年記念イベント(9日ライブ・イベント)における組織のあり方



(図 A-6) PI と他組織との関係の変遷



⑦ 事業参画者

⑧ 参画者の参加方法を具体的に考える

⑦および⑧で私たちが行ってきた作業は、イベントそのものに必要なもの「ヒト」を確保することと、地域イベントとしての特性、つまり参加者の主体的参加を保つことであった。活動当初に理念の中から挙げた青少年と中でも音楽に興味のある者というイベントの参加条件に加え、このイベントの主旨である主体的参加が可能な者を対象とし、出演者の募集を行った。その後、参画者の具体的な関わりかたを考えるという作業にあたっても、私たちの基本的な役割は彼らに問題を提示するに限定している。つまり、問題解決に関しては、参画者自らが関わっているという事実から参加者の主体性を保つということが説明できる。またその主体性を保つという主旨のもと、このイベントを遂行していくために参画者のニーズをくみ取るという作業も欠かさなかった。そのことにより参画者の強制的に参加させられているという意識の発生を回避することができた。

また、参加者同士のコミュニケーションを図ることによって「協働意識」を育み、「人間関係」の構築を促している。出演順を出演者同士で決定させたり、パンフレットを共同作業により完成させたことはこれに相当する。そのために参加者同士の作業時には話しやすい雰囲気を作ったり、場を和ませるという努力も怠らなかった。それによってバンド出演者同士のつながり（同世代交流）に関してはある程度の成功も怠らなかった。それによってバンド出演者同士のつながり（異世代交流）を考えるならば、それは全く皆無であったと言える。そして、この異世代交流における失敗の原因と解決策は⑤組織体制にて記述している。

参画者のニーズをくみ取り、問題を提示し、参加者同士のコミュニケーションを図るというこれまでの一連の活動は、地域イベントの有効性を保つ上で欠かせない住民の主体的参加を喚起していると言え、今回のイベントの成功につながったのではないだろうか。

チェックリスト項目 22～25 で該当する期間では、「プロジェクト」「イベント」という対象が存在し、項目 26～33 の期間で新たに「イベント出演者」という対象が現れることがコレスポネンセス分析から分かる。このことは私たちの意識がプロジェクトそのもの・漠然としたイベントから具体的な参画者の存在するイベントへと向かったことを示している。また、期間 10 で「プロジェクト」の点数を「イベント」が追い越すのは出演者が決定し、イベントの実現を意識したからである。感情のカテゴリーから、この時期に点数が伸びる「安心」は出演者の決定や、イベントの実現に近づいた実感からによるものである。期間 15～17 で「信頼」「喜び」「驚き」「愛着」が共通してたどる得点の仕方は、「イベント出演者」にも見られる。期間 10 以降で、「イベント出演者」という対象があらわれ、私たちは先の 4 つの感情を彼らに対して抱くようになった。これらはこの時期に出演者ミーティングの内容を検討し、実際に行っていたからである。一方で、この時期「自分（たち）」「PI メンバー」という対象が高得点を示すようになる。それに伴い、「決起」「責任感」「感謝」「信頼」が高得点を示している。ここで、次のような考察を行うことができる。

まず、「責任感」に対する対象は「自分（たち）」であるが、「信頼」に対する対象は「PI メンバー」であると言える。これらが同時に伸びているということは、互いに「信頼」し合い「責任」ある行動をとろうと「決起」していたことを物語っている。そのことに対し、「感謝」するメンバーがいたことも伺える。実際、この時期集合できなかったメンバーがいたり、各人の得意とする分野に仕事を分担し、出演者ミーティングに臨んでいた。またイベント当日直前に「責任感」「感謝」の得点がなくなっているが、「信頼」だけが得点を残している。つまり、イベント直前にはそれまで欠けていたメンバーが全員集合し「信頼」を残したまま、おのずと各自が「責任」を感じることなく自分の仕事をこなしていたということである。そうすることでこのイベントの成功を収めることができたと言えるだろう。

- ⑨ 日程
- ⑩ 実現性
- ⑪ 活動中のある時点での振り返り

事業の実現に必要な開催日・スケジュールの調整、それらを行う時に付随する活動への評価をどの時期に行っているかをチェックしている。開催日が決定し、そこから始まる開催日までのスケジュールの確認作業は⑨日程から分かる。

このスケジュールの確認という作業を予定事項が決定する度に、行っていたということはイベントを運営するにあたって私たちがその責務を忠実にこなしていたと言えるのである。また、スケジュールを確認するだけでなく、その際に⑩実現性を計り⑪活動中でのある時点での振り返りを行うことで、イベント本番に向けてより現実味あるイベントの構想を行うことができる。しかしながら⑩⑪のチェックが少ないことから、実際のイベントが現実性から離れたもの、またアクシデントが起こる可能性の高いものであったように読み取れる。

イベント当日の警備に関して言うならば、それは少なからず当てはまる。というのは、イベント当日の警備に関して、実際にはボランティアや SRK の方々が行い、機能していたと言える。このことに私たちは、イベントが成功したために注意を払わなかった。つまり、これは、イベントが成功したために回避された危機であり、実際に私たちはその実現性に関して考慮していたわけではなかった。⑤組織体制で述べたように、私たちの中に運営者としての責任感があり、組織体制の明確化を行っていたとすればこの危機管理のなさは回避できたのである。

しかし、イベントに実現性が全くなかったわけではない。例えば、出演バンド選考の際に、19 バンドから 13 バンドに出演数を絞った。それはユーブラの運営時間という現実的な時間を考慮に入れたからである。つまり、実現性に関しては意識していたということである。しかし、これらを私たちがチェックリストに挙げなかったのは、それがあまりにも当たり前のことだったからである。この例を含め、私たちは常に実現性に関しては配慮していた。また、私たちは自分たちの得意分野である「若さ」や「それぞれの専門知識」を常に活用してきた。例えば、ホール設営およびパンフレット・チラシ作成においては、私たちの得意分野で分担し、それぞれの仕事の能率を高めていた。つまり多くの部分において、私たちはその実現性を考えていたのである。

ところで、予定事項が進む上で各時点での評価は、事業を先へ進むためには必要不可欠なことである。その評価方法には自己反省と外部評価という二通りの手段があるが、まずその中で自己反省について考察してみる。事業を行う上でこの自己反省というものを伴わないとすれば、その事業を次へ進めるのは非常に困難である。しかしながら、私たちの事業に関して言うならば、この自己反省をさほど行わなかったに困る。しかしながら、私たちがの事業に関して言うならば、この自己反省をさほど行わなかったに困る。しかしながら、私たちがの事業に関して言うならば、この自己反省をさほど行わなかったに困る。例えば、期間 4 の時点で「プロジェクト」や「自分(たち)」を対象に、「不安」「焦り」といった感情を抱いているのに対し、期間 6 においては「意気込み」「責任感」「喜び」などの前向きな感情へと変化させている。つまり、「不安」「焦り」といった感情を次の活動への原動力である「意気込み」「責任感」「喜び」に昇華させているということである。しかし、もう一方の手段である外部評価に関しては、一切受けなかったことになる。ここでいう外部とは、支援者である行政と観客である地域住民に相当する。そして、この 2 者からの評価を得なかったということは、地域イベントとしてこの事業を以後行政とともに継続させるうえでは、致命的であった。これは、⑫で述べる中間支援者としての役割から考えた上でも私たちが怠慢だったとしか言いようがない。

⑫ 中間支援としての役割を考える

ここでは、私たちがいつの時期に中間支援という作業を行っていたかをチェックしている。まずチェックリスト項目 40 である。このチェック項目に関しては私たちが事業主として行ったイベントの時には、いっさいチェックが入っていない。そして次のイベントに向かって新たな運営委員が動き出してからチェックが入っている。このことは、私たちの場合は PI がそもそも支援者と近い距離にあり、また PI が出

演者の意図を汲み取っていたため、支援者と出演者の直接のコミュニケーションに対して意識していなかったことを表している。しかし、今回のイベントの場合は出演者が支援者と直接に話をする必要性が起こった。そのため後継者となる出演者が SRK とコミュニケーションをほとんど持たずに、次のイベントへと運営を始めだすという事態を引き起こした。この時点で、チェックリスト項目 40 にチェックが入ったのである。コレスポンド分析からはこの時期について次のようなことが考察できる。対象が「イベント出演者」「プロジェクト」に得点があることから、次のイベントを強く意識していたことが分かる。「信頼」「喜び」「驚き」「愛着」の感情が高いことは、参画者に次回イベントを成功させて欲しいという私たちの願いが表われていることを示している。

チェックリスト項目 41 は支援者である行政・SRK への経過の報告に関する項目である。外部からの評価について項目 39 で扱っていたが、ユープラに最も近い外部と言える行政から評価を得るための報告はこの項目 41 が負っている。実際のところ、SRK の辻氏へ報告は随時行っており、連絡はできていた。それと比較すると行政への連絡の回数は少ない。また、7 月 4 日に辻氏から行政への中間報告を勧められ行ったが、それでもなお、私たちの意識が少なかったことはこの項目のチェックの少なさから分かる。そのため項目 39 において外部組織はおろか行政からさえ、評価を受けることがなかったのだといえる。また報告会という形はボランティア会議でしか踏まなかったため、ボランティアへの報告が手薄となった。このことはボランティアと私たちのコミュニケーションとして下の項目 42 で考察する。

チェックリスト項目 42 は出演者・ボランティアとのコミュニケーションに関する項目である。7 月から 10 月までの期間にチェックが入っているが、考察において次の 2 つの期間に分ける。1 つ目は数字が顕著にあらわれている、出演者ミーティングからイベント当日までの「イベント前」、2 つ目はイベント終了後から 10 月までの「イベント後」とする。「イベント前」ではイベントを開催させるために出演者・ボランティアと私たちがコミュニケーションを取る必要があった。次回イベントに関しては、参画者とボランティアが直接コミュニケーションをとる必要がある。そのためにも本来「イベント前」で出演者（次回イベント参画者）とボランティアが、コミュニケーションをとっておく必要性があった。しかし実際のところ出演者とボランティアを確実につなぐコミュニケーションをとることは達成できなかった。この原因をコレスポンド分析から探してみることにする。イベント前では「イベント出演者」「ボランティア」両者の対象に得点が存在する。一方、イベント後では「イベント出演者」にしか得点がみられない。また、イベント前における「ボランティア」の得点は「イベント出演者」に比べ低い。ここで興味深いことは、「ボランティア」という対象がイベント後で姿を消すと同時に、感情のカテゴリーにおける「不満」「不信」「嫌悪」がその姿を消すことである。つまり、私たちとボランティアとのコミュニケーションには先の 3 つの感情が存在していたのである。この 3 つの感情が私たちとボランティアの間でのコミュニケーションの困難さを産んだ原因だと言える。そのため出演者とボランティアの間に私たちが的確に介入することができなかった。さらにこの 3 つの感情を引き起こしていた原因であるが、それは⑤組織体制で述べた組織の不明確さであると言える。ボランティアとのコミュニケーションでは上記のような結果にいたったが、出演者とのコミュニケーションに関しては、「嫌悪」とは逆の感情を示している。具体的には、イベント当日からイベント後にかけての「イベント出演者」という対象の得点の変化と同様の動きを示す「驚き」「愛着」という感情がそれである。このことは、出演者とのコミュニケーションがより深まった結果であると言える。

私たちは中間支援としての役割を果たすべく行動してきた。実際にイベントを開催し、今回のイベントも開催へと向かっている。しかしながら、出演者と支援者である SRK およびボランティアとのコミュニケーションに関しては十分なアクションを起こすことが出来ていなかった。同様のことが私たちとボランティアとの関係にもいえる。ただ、本論文執筆時（2002 年 1 月）にはあるが、次回イベント参画者がボランティア会議で発言することが可能な状況を完成させるにいたった。このことにより次回イベント参画者は SRK・ボランティアとより円滑なコミュニケーションを行えるはずである。

パートⅡ B. 「イベントによる青少年の意識変化」

i. リッカート法による社会調査

○調査目的

「住民参画型の地域イベントによって、イベント参画者の意識が変わる」という仮説を立証し、その調査結果からそのイベントが地域活性化の有効な手段であったかどうかを考察する。

○調査方法

イベント前後の計2回、同一の質問をユープラ利用者に実施する。イベント出演者とそれ以外の者を対象に、そのイベント前後の意識の変化を比較する。

○調査範囲

ユースプラザKOB E・WEST (神戸市須磨区、パートIの3参照)

○調査対象

ユースプラザKOB E・WEST 利用者

○調査対象の選定

同施設内のフリースペースおよび受け付け周辺にいる中高生を主とした青少年に限る (有意抽出法)

○調査法の選択

私たちが対象と考える利用者に直接調査票を配り、その場で回答してもらい回収する (配票調査法)

○調査票の作成

1つの質問に対し「1. 全くそう思わない」「2. あまりそう思わない」「3. まあまあそう思う」「4. かなりそう思う」の4つの選択肢にそれぞれ1～4の得点を与え、各質問の回答の合計点で各個人の意識を測る。(リッカート法)

○質問項目の作成

① 同じ内容・同じ範疇にある質問項目をひとまとめにする。(KJ法)

② A. 1つの質問だけで独立した1つの概念を構成している。

B. 2つ以上の概念、もしくは明確な概念を有しない。

以上2点から質問紙の信頼性を高める上で削除することが妥当であると考え、その質問を削除した。

③ 削除した結果、最終的に5つの概念が残った。

その5概念とは「ユープラに対する関心度 (帰属意識)」

「地域に対する帰属意識 (帰属意識)」

「交流の幅と深さ (交流)」

「助け合いに対する関心度 (協働)」

「やりがいの有無 (やりがい)」

計5大概念「コミュニティ度 (地域の活性化)」を測る。

丸かっこ () 内の「帰属意識」「交流」「協働」「やりがい」は、(はじめに) で述べた「地域の活性化」につながる4つの概念に相当する。

○調査の実施期間

1回目イベント前…2001年8月7日～9月7日

2回目イベント後…2001年9月18日～10月28日

ii. 集計・分析

各質問の得点を合計し、イベント前後でそれぞれの合計点を従属変数とし、イベント前後という時間・回答者を独立変数として分散分析を行った。今回の調査では、イベント前の回答者は「参加（調査時ではイベント参画・出演予定者）」と「不参加（「参加」以外のもの）」に分けている。またイベント後の調査では、回答者を「参加（イベント出演者）」「不参加（イベントに一切関わらなかった者）」「鑑賞（イベントを観た者）」「N.A.（いずれの回答もしなかった者）」に分けている。

イベント前：「参加（出演者）」・「不参加（その他）」

イベント後：「参加（出演者）」・「不参加（無関係者）」・「鑑賞（鑑賞者）」・「N.A.（不明）」

また、全ての概念の合計から分析を行ったものと、各概念ごとに行ったものがある。以下の順に分析結果を載せる。

- ①コミュニティ尺度(②～④の5概念の合計)
- ②ユープラに対する関心度(帰属意識)
- ③地域に対する帰属意識(帰属意識)
- ④助け合いに対する関心度(協働)
- ⑤交流の幅と深さ(交流)
- ⑥やりがいの有無(やりがい)

①コミュニティ尺度

被験者間因子			
時間	値ラベル	N	
1.00	前	180	
2.00	後	172	
参加4	N.A.	10	
1.00	参加	94	
2.00	不参加	230	
3.00	鑑賞	18	

記述統計量				
従属変数: CMMNTY2				
時間	参加4	平均値	標準偏差	N
前	参加	180.7083	26.9120	48
	不参加	191.1439	24.1766	132
	総和	188.3611	25.2854	180
後	参加	195.3043	31.9311	46
	不参加	184.8776	27.7887	98
	N.A.	185.8000	27.0218	10
	鑑賞	209.2222	30.7868	18
	総和	190.2674	30.0245	172
総和	参加	187.8511	30.2189	94
	不参加	188.4739	25.9057	230
	N.A.	185.8000	27.0218	10
	鑑賞	209.2222	30.7868	18
	総和	189.2926	27.6792	352

被験者間効果の検定					
従属変数: CMMNTY2					
ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	14833.698 ^a	5	2966.740	4.040	.001
切片	4848442.461	1	4848442.5	6602.461	.000
時間	1149.628	1	1149.628	1.566	.212
参加4	6212.598	3	2070.866	2.820	.039
時間 * 参加4	7211.653	1	7211.653	9.821	.002
誤差	254081.163	346	734.339		
総和	12881671.000	352			
修正総和	268914.861	351			

a. R2乗 = .055 (調整済みR2乗 = .042)

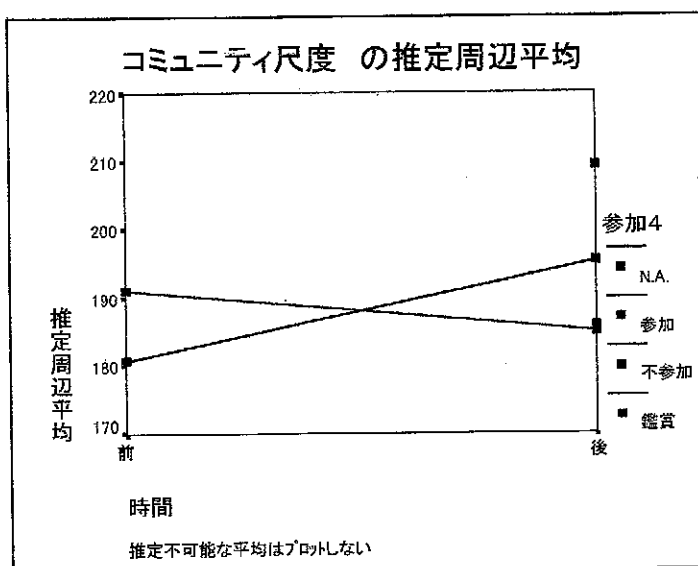
(図 B-1)

コミュニティ尺度 (図 B-1)

ここでは、地域が活性化しているかどうかを測るものさしとしてコミュニティ尺度を用いている。

イベント前では、参加予定者よりも不参加予定者の方がコミュニティ意識が高かった。

イベント後では、それが不参加者よりも参加者の方がその意識は高くなり変化が見られた。



②ユープラに対する関心度(帰属意識)

被験者間因子			
	値ラベル	N	
時間	1.00 前	156	
	2.00 後	168	
参加4	.00 N.A.	10	
	1.00 参加	75	
	2.00 不参加	220	
	3.00 鑑賞	19	

記述統計量				
従属変数: YPに対する関心度				
時間	参加4	平均値	標準偏差	N
前	参加	102.3778	21.9982	45
	不参加	109.1081	17.2708	111
	総和	107.1667	18.9317	156
後	参加	108.5000	30.1602	30
	不参加	101.2202	23.3505	109
	N.A.	109.0000	18.4210	10
	鑑賞	123.4211	20.6890	19
総和	参加	104.8267	25.5604	75
	不参加	105.2000	20.8407	220
	N.A.	109.0000	18.4210	10
	鑑賞	123.4211	20.6890	19
総和		106.2994	22.2772	324

被験者間効果の検定					
従属変数: YPに対する関心度					
ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	10167.832 ^a	5	2033.566	4.307	.001
切片	1574707.931	1	1574707.9	3335.532	.000
時間	42.280	1	42.280	.090	.765
参加4	5704.436	3	1901.479	4.028	.008
時間 * 参加4	2661.882	1	2661.882	5.638	.018
誤差	150128.128	318	472.101		
総和	3821353.000	324			
修正総和	160295.960	323			

a. R2乗 = .063 (調整済みR2乗 = .049)

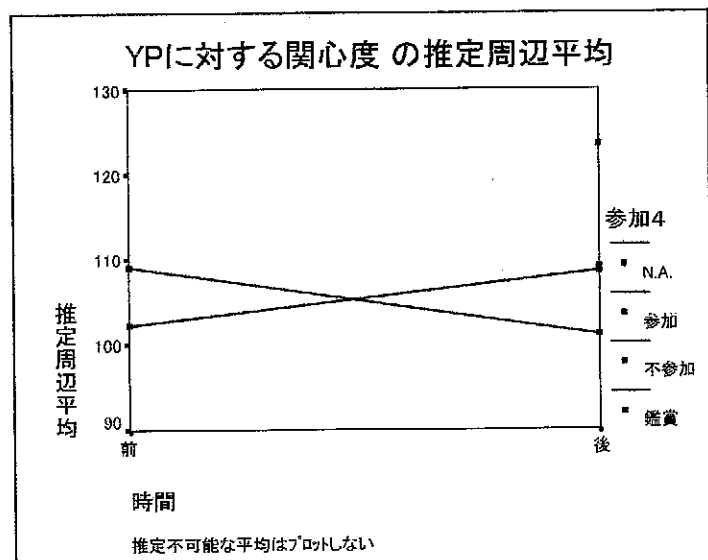
(図 B-2)

ユープラに対する関心度(図 B-2)

ユースプラザKOB・WESTIに対する関心度からは、回答者である利用者の同施設に対する帰属意識を測るにすることができる。ここで言う「帰属意識」とは、私たちが言うところの「地域への帰属意識」(図 B-3)の中でも、特にその地域で活性化につながるとされる媒体(施設)への意識である。

イベント前では、参加予定者よりも不参加予定者の方がユープラに対する関心度が高かった。

イベント後では、それが不参加者よりも参加者の方がその意識は高くなり変化が見られた。



③地域に対する帰属意識(帰属意識)

被験者間因子			
	値ラベル	N	
時間	1.00 前	174	
	2.00 後	168	
参加4	.00 N.A.	10	
	1.00 参加	80	
	2.00 不参加	233	
	3.00 鑑賞	19	

記述統計量				
従属変数: 地域に対する帰属意識				
時間	参加4	平均値	標準偏差	N
前	参加	18.2800	3.9177	50
	不参加	20.4355	3.4150	124
	総和	19.8161	3.6873	174
後	参加	19.5667	4.8401	30
	不参加	19.2202	3.9024	109
	N.A.	16.7000	5.1651	10
	鑑賞	20.3158	4.3976	19
	総和	19.2560	4.2398	168
総和	参加	18.7625	4.3026	80
	不参加	19.8670	3.6935	233
	N.A.	16.7000	5.1651	10
	鑑賞	20.3158	4.3976	19
	総和	19.5409	3.9724	342

被験者間効果の検定					
従属変数: 地域に対する帰属意識					
ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	282.076 ^a	5	56.415	3.718	.003
切片	48354.307	1	48354.307	3186.413	.000
時間	7.217E-02	1	7.217E-02	.005	.945
参加4	141.369	3	47.123	3.105	.027
時間 * 参加4	88.701	1	88.701	5.845	.016
誤差	5098.851	336	15.175		
総和	135973.000	342			
修正総和	5380.927	341			

a. R2乗 = .052 (調整済みR2乗 = .038)

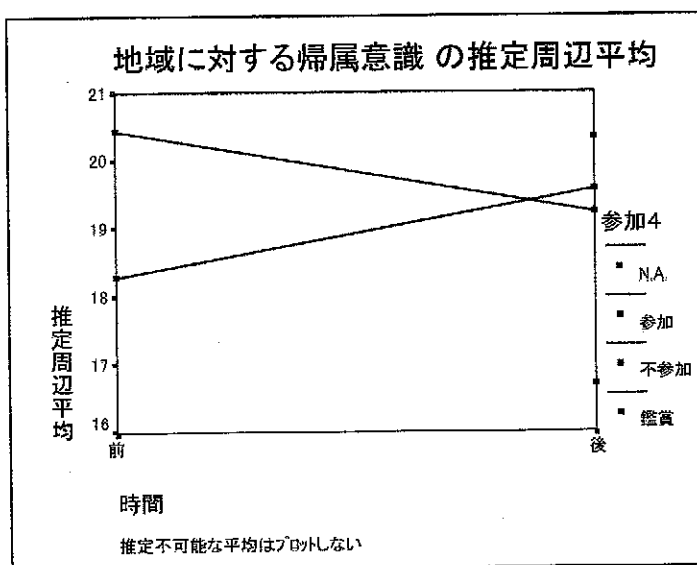
(図 B-3)

地域に対する帰属意識(図 B-3)

ここでは「地域に対する帰属意識」を測っている。

イベント前では、参加予定者よりも不参加予定の方が地域に対する帰属意識が大幅に高かった。

イベント後では、それが不参加者よりも参加者の方がその意識は高くなり変化が見られた。



④助け合いに対する関心度(協働)

被験者間因子			
	値ラベル	N	
時間	1.00	前	196
	2.00	後	168
参加4	.00	N.A.	10
	1.00	参加	82
	2.00	不参加	253
	3.00	鑑賞	19

記述統計量				
従属変数: 助け合いに対する関心度				
時間	参加4	平均値	標準偏差	N
前	参加	10.1538	2.3380	52
	不参加	10.6528	1.9154	144
	総和	10.5204	2.0418	196
後	参加	10.6667	2.1064	30
	不参加	10.2477	2.0237	109
	N.A.	11.1000	1.7920	10
	鑑賞	11.8421	2.1151	19
	総和	10.5536	2.0843	168
総和	参加	10.3415	2.2565	82
	不参加	10.4783	1.9691	253
	N.A.	11.1000	1.7920	10
	鑑賞	11.8421	2.1151	19
	総和	10.5357	2.0587	364

被験者間効果の検定					
従属変数: 助け合いに対する関心度					
ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	54.723 ^a	5	10.945	2.641	.023
切片	15848.864	1	15848.864	3823.860	.000
時間	.169	1	.169	.041	.840
参加4	32.621	3	10.874	2.624	.050
時間 * 参加4	12.267	1	12.267	2.960	.086
誤差	1483.813	358	4.145		
総和	41943.000	364			
修正総和	1538.536	363			

a. R2乗 = .036 (調整済みR2乗 = .022)

(図 B-4)

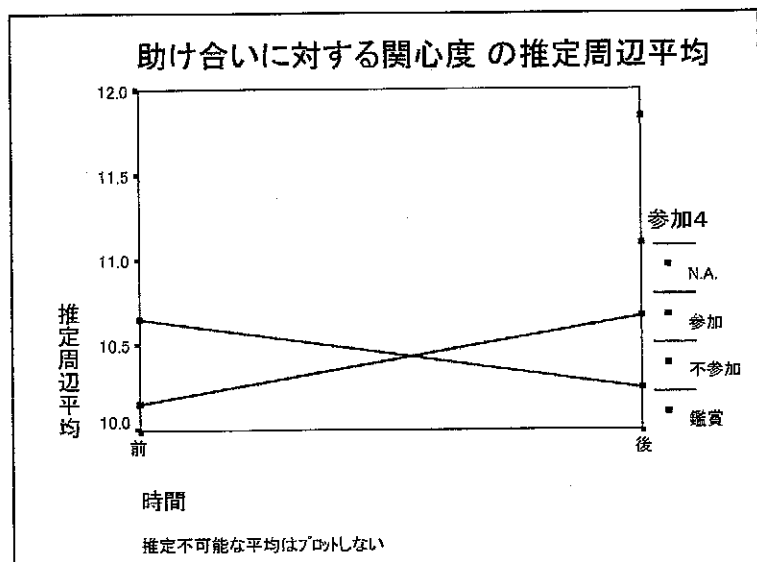
助け合いに対する関心度

(図 B-4)

「協働」をキーワードに人々が助け合いにどれほど関心を持っているかを計測した。

イベント前では、参加予定者よりも不参加予定者の方が助け合いに対する関心度は高かった。

イベント後では、不参加者よりも参加者の方がその意識は高くなり変化が見られた。



⑤交流の幅と深さ(交流)

被験者間因子			
	値レベル		N
時間	1.00	前	178
	2.00	後	168
		N.A.	10
	1.00	参加	80
	2.00	不参加	237
	3.00	鑑賞	19

記述統計量				
従属変数: 交流の幅と深さ				
時間	参加4	平均値	標準偏差	N
前	参加	28.4400	3.7316	50
	不参加	28.4766	4.1354	128
	総和	28.4663	4.0157	178
後	参加	28.6000	5.1233	30
	不参加	28.1376	4.5876	109
	N.A.	26.8000	2.9364	10
	鑑賞	30.2105	4.3151	19
	総和	28.3750	4.6063	168
総和	参加	28.5000	4.2753	80
	不参加	28.3207	4.3431	237
	N.A.	26.8000	2.9364	10
	鑑賞	30.2105	4.3151	19
	総和	28.4220	4.3065	346

被験者間効果の検定					
従属変数: 交流の幅と深さ					
ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	97.250 ^a	5	19.450	1.049	.388
切片	108314.936	1	108314.936	5844.507	.000
時間	.455	1	.455	.025	.876
参加4	91.470	3	30.490	1.645	.179
時間 * 参加4	3.540	1	3.540	.191	.662
誤差	6301.143	340	18.533		
総和	285900.000	346			
修正総和	6398.393	345			

a. R2乗 = .015 (調整済みR2乗 = .001)

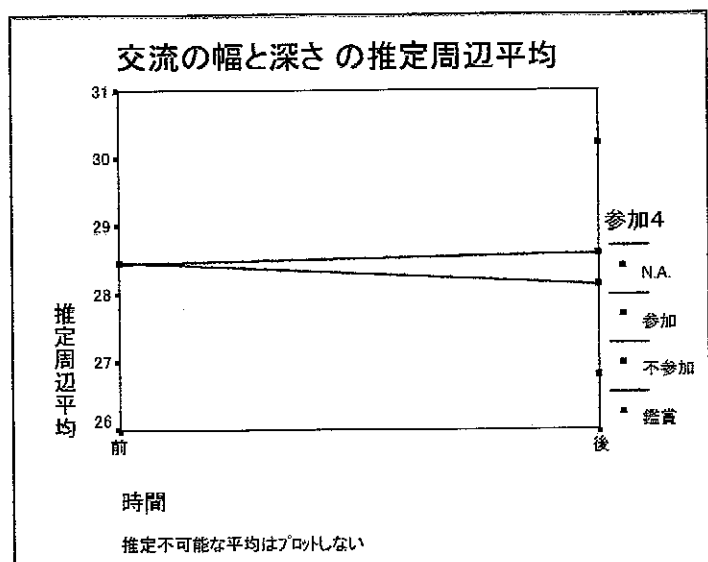
(図 B-5)

交流の幅と深さ(図 B-5)

交流の幅とは交友関係の広さを, 交流の深さとは人間関係におけるその親密さを表している。ここではその2点の変化を追ってみた。

イベント前では, 参加予定者よりも不参加予定者の方が交流の幅と深さはわずかながら高かった。

イベント後では, 不参加者よりも参加者の方がその意識は高くなり変化が見られた。



⑥やりがいの有無(やりがい)

被験者間因子			
時間	参加4	値ラベル	N
1.00	前		188
2.00	後		168
参加4	1.00	N.A.	10
	1.00	参加	79
	2.00	不参加	248
	3.00	鑑賞	19

記述統計量				
従属変数: やりがいの有無				
時間	参加4	平均値	標準偏差	N
前	参加	24.1224	3.7674	49
	不参加	23.3165	4.3921	139
	総和	23.5266	4.2432	188
後	参加	24.7667	3.9886	30
	不参加	22.3670	4.4089	109
	N.A.	22.2000	3.9944	10
	鑑賞	24.6316	3.9470	19
	総和	23.0417	4.3628	168
総和	参加	24.3671	3.8403	79
	不参加	22.8992	4.4159	248
	N.A.	22.2000	3.9944	10
	鑑賞	24.6316	3.9470	19
	総和	23.2978	4.3008	356

被験者間効果の検定					
従属変数: やりがいの有無					
ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	238.392 ^a	5	47.678	2.637	.023
切片	74410.145	1	74410.145	4115.575	.000
時間	1.330	1	1.330	.074	.786
参加4	199.393	3	66.464	3.676	.012
時間 * 参加4	36.231	1	36.231	2.004	.158
誤差	6328.046	350	18.080		
総和	199798.000	356			
修正総和	6566.438	355			

a. R2乗 = .036 (調整済みR2乗 = .023)

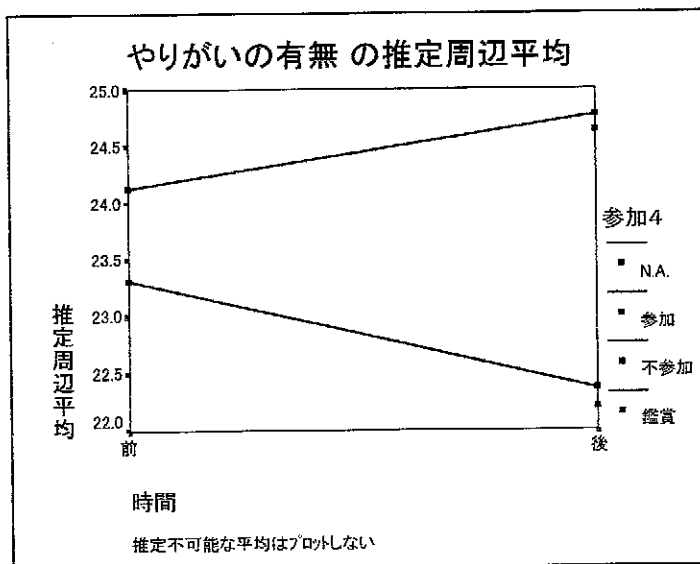
(図 B-6)

やりがいの有無(図 B-6)

人々が「やりがい」をもって何かに取り組んでいるかどうか、またそれがあれば、それに対してどれほど熱中しているのかどうかを測定してみた。

イベント前では、参加予定者が不参加予定者よりもやりがいの有無が高かった。

イベント後では、その差が大きくなり変化が見られた。



iii. 考察・評価

イベント前後で回答者の意識の変化がみられた。つまり、この調査から「住民参画型の地域イベントによって、イベント参画者の意識が変わる」という仮説を立証することができた。加えて、イベント参加者の意識変化の方向として、イベント後には上昇していることがわかる。

今回の調査目的は、地域の活性化の手段としてのイベントの有効性を測るものであった。つまり、コミュニティ尺度、およびそれを構成する私たちが〈はじめに〉で挙げた4つの概念「帰属意識」「交流」「協働」「やりがい」においても全て参加者（出演者）の得点が上昇したということは、今回のイベントは地域活性化に一役買うことのできる有効な手段のひとつだったといえるのである。

7. まとめ（パートⅠ・パートⅡから）

私たちが今イベントを振り返って言えることは、今回のイベントにおいては地域住民の主体的参加は守られ

たということである。私たちは一連の活動を通して、参加者のニーズをひろうことと、イベントに関する問題の提示に細心の注意を払った。それは、結果的に参加者の主体性の保護につながった。さらにイベント支援者である行政とSRKの要望もくみとり、彼らとパートナーシップを築くにいった。これは、私たちが行政・SRKと協働し、このイベントを成功させたという証明である。つまり、これは、仮説a「行政と参画者の中間支援者の存在によって、本来の住民参画型イベントの有効性を保つことができる。」の立証である。

また、今回のイベントは住民参画型地域イベントであり、パートⅡの仮説bの立証から、それが地域の活性化の手段として有効であるということも証明されている。

現在、企画が進められている「ユース・カルチャー・マーケット 02」は私たちが運営した1周年記念イベントの出演者の中から発掘された人材が中心となって運営されている。彼らはユープラ近隣に住む青少年であり、私たちが運営したイベントで、そのつながりを密にした者たちである。そして、彼らは「自分たちの居場所」としてユースプラザを認識し、コモンズとして施設の機材を扱うようになった。さらには「自分たちの表現の場」を作りたいという共通理念のもと、それに賛同する仲間を自ら集め、ついには自分たちのイベントを開催するという具体的な内容にまでその想いを発展させた。

この現状は「はじめに」で述べた

「市民一人一人が、殺伐とした都会の中で人間関係が薄く、自己を見失いながら生きるのではなく、一人一人が地域で何らかの役割を果たしている、大切にされていると実感すること、いわば生きがいを持つとともにそれぞれの目標を持ち、自らの分野で活発に活動している状態」

というような地域が活性化している状態と合致している。つまり現在の状況は、地域が活性化していると言えるのである。

これらを踏まえた上で、次のことを述べて本論文の結びとする。

地域の活性化の有効な手段としての可能性を持つ今回の私たちの企画は、他の地域においてもその効果を発揮するという将来性を十分に含んでいる。よってこの企画を地域の活性化に関わる多くの人々への提言としたい。

8. 参考文献

1. はじめに

- 福留 強, 1992, 「1 文化によるむらおこし・まちおこしの方法」岡本包治編著.『まちづくりと文化・芸術の復興——創造・継承・発展』ぎょうせい, 現代生涯学習全集 7 巻: Pp.6-7
- 池田 秀男, 1992, 「1 地域活性化におけるイベントの意義と課題」岡本包治編著.『イベントによる地域活性化——企画・運営』ぎょうせい, 現代生涯学習全集 8 巻: Pp.8-14
- 神戸市, 2000, 「神戸市復興計画推進プログラム——新生・神戸をめざして」神戸市企画調整局企画調整部総合計画課
- 森 林, 1999, 「2 章 子どもの問題の原点としての幼児期」日本子ども社会学会編.『いま、子ども社会に何がおこっているのか』北大路書房. p.21
- 震災復興総括・検証研究会, 2000, 「(2) 神戸市震災復興総括・検証報告書——生活再建分野」神戸市震災復興本部総括局総合計画課
- , 2000, 「(3) 神戸市震災復興総括・検証報告書——安全都市分野」神戸市震災復興本部総括局総合計画課
- , 2000, 「(4) 神戸市震災復興総括・検証報告書——住宅・都市再建分野」神戸市震災復興本部総括局総合計画課
- , 2000, 「(6) 神戸市震災復興総括・検証報告書——生活再建・意見集」神戸市震災復興本部総括局総合計画課
- , 2000, 「(7) 神戸市震災復興総括・検証報告書——生活再建・取組集」神戸市震災復興本部総括局総合計画課
- 立木 茂雄, 1997, 「7 章 ボランティアと社会的ネットワーク」『ボランティアと市民社会——公共性は市民が紡ぎ出す』晃洋書房.
- 富樫 康明, 2000, 「3 章 何といっても祭りだ／文化の源泉は祭りにある」『NPO いきいきコミュニティ』市民出版, Pp.88-89
- 若松 進一, 1992, 「3 市民参加によるイベントの企画と運営」岡本包治編著.『イベントによる地域活性化——企画・運営』ぎょうせい, 現代生涯学習全集 8 巻: Pp.52-58
- 山岸俊夫, 1999, 『安心社会から信頼社会へ——日本型システムの行方』中公新書. p.8

パートⅠ A. 「アクション・リサーチ」

- 経済企画庁 国民生活局, 1998, 「事業プランの立案と実施——市民活動団体の運営のために」大蔵省印刷局
- 浅海義治・伊藤雅春・狩野三枝, 1993, 「参加のデザイン道具箱」世田谷まちづくりセンター

パートⅡ B. 「イベントによる青少年の意識変化」

- 井上和子・小野能文, 1999, 『よりよい社会調査をめざして』創元社
- 盛山和夫・近藤博之・岩永雅也, 1996, 『社会調査法』放送大学教育振興会

9. 資料 企画書・イベント関連資料

「企画書」

「イベント関連資料」

バンド募集チラシ
出演者ミーティング予定表
司会表
セットリスト表
照明表
イベント当日シフト表
ホール設営図
ポスター・チラシ
パンフレット表紙
イベント後振り返りシート

私達は、関西学院大学社会学部で、社会福祉を専攻している新4回生です。この度、卒論研究のため、ユースプラザパティオさんをテーマに活動させて頂くことになりました。私達はその卒論研究をグループで行っています。メンバーは5名、それぞれ立木ゼミの学生です。

関西学院大学社会学部立木茂雄研究室

<<http://www.soc.kwansei.ac.jp/tatsuki/index.shtml>>

教授 立木 茂雄

学生 大西 浩司

岡田 晋爾

森山 靖士

山口 郁

山田 千寛

私達の卒論のテーマ・研究活動は、震災以降の神戸市の"地域復興"から、人と人のつながりを重視した上で、その2次的復興、つまり物理的ではなく精神的なサポートに的を絞っています。現在の神戸は震災の跡形を消すほどに復興が進んでいます。しかし人の心の中には、消えない傷を持ちながら生きている人も多くいます。無くしてしまった人と人とのつながり、そして新たに築くべきつながり。これらは、一度立ち止まってしまうと、なかなか取り繕えないものです。私たちが今回パティオさんに辿り着いたのにも、「施設の存在」と「利用者の存在」という分離した実状を如何につなぎ合わせるかという復興にまつわる理由があります。つまり、施設はあれど、その利用者同士のつき合いがない、出来ない。ならば、創っていいんじゃないか、ということに至るのです。

今、その中で、私達はひとつの提案と、こと興しの時にいるのです。

次のような統計があることをご存じでしょうか？

>公共性を「わがこと」と思う

>立木茂雄研究室ホームページより

<

<http://www.soc.kwansei.ac.jp/tatsuki/papers/SanseikenForum/MainBody2.htm>

>

神戸・阪神間の市民に見られる公共性を「わがこと」と思う意識は、一学徒の単なる繰り言ではない。神戸と他都市の意識調査の比較からも、数字の上で明らかに差が存在する。図2は1999年9月に行った神戸市民1万人アンケート結果と、同じ項目を使って1999年12月に時事通信社が実施した全国世論調査の結果を比較したものである。私的な欲求をある程度押さえても、他

人との結びつきや他人のことに関心を向けることが大切である、という気持ち
が、神戸・阪神間の市民では他都市と比べて 1 割から 2 割も高いことが明らか
になった。

<図 2 上記 URL よりインターネットで確認して下さい>

私たちが押し進める企画は、市民が作り上げる"公共の場"なのです。それは、
管理された施設や催し物ではなく、"他人との結びつき"のために、市民が自ら作
り上げる"協働の意識"なのです。人のために何かをしてあげるといふ慈善事業
ではありません。皆が主張し、譲歩し合いそして創りあげるような"場"の提供・
提案・運営。これが私たちの卒業研究です。

尚、私たちの活動はオンタイムで掲示しております。

<<http://www2.neocity.to/treebbs/tree.cgi?board=030/kidataro>>

・・・2. 中高生への PI 班 & メンバー紹介用大判ポスタ
ー作成。

→自分たちで作ります。

2 企画書・・・第 2 版までと、第 3 版の清書。パティオ関係者に、「良く分かる、
直ぐ分かる、愉しそう」をモットーに、"パティオ案"に"PI 案"を上手くのせてい
けるような文書を作成。

何故

- ・パティオを利用する人の親睦と、地域の人との更なる利用を図る。
- ・利用者の発表の場を創る。
- ・やりがいや、地域の活性化。
- ・パティオの自主運営や参画促進。
- ・パティオを地域の人達で共管理する意識を培う。

いつ

第一案 8 月後半

第二案 10 月 10 日 (PI 案)

第三案 2 月

どこで

パティオと、その周辺

誰が

- ・パティオの地域利用者。
- ・パティオ利用してない人も含める。

何を

- ・パティオを利用している団体を集めて、活動発表の場を創る
- ・パティオ未使用の団体を、パティオへの参加と同時にイベントへの参加を求める。
- ・利用者のニーズを聞き出す機会作り。
- ・やりがい・生きがいの発見場所。

どのように

- ・地域の人や利用者に、このイベントの主旨を理解してもらう。
- ・参加団体を集める。
- ・参加団体から代表者を集って参画してもらう。
- ・参加団体と共に、ライブそのものの運営と企画を進めていく。

[illegible]

7.30.Mon.2001

ユースプラザ・K O B E ・ W E S T 1周年記念ライブ実行委員会
(関西学院大学立木研究室プロジェクト・イマジン班)

ユースプラザ・K O B E ・ W E S T 1周年記念ライブ 第1回 出演者ミーティング

今回はライブ・イベントにご応募下さりありがとうございました。

遂に夏休みが始まりました。海にもスタジオにも行かなければならない、忙しい日々がみなさんを襲っているのでしょうか？須磨浦の水平線の、あの入道雲にも負けない、ボリュームのあるイベントをつくり上げましょう。

次第

スタート 13:00

1. あいさつ (青少年団体連絡協議会)。
(5分) 13:05
2. プロジェクト・イマジンのプロフィール (関西学院大学学生)。
2分×5人 (10分) 13:15
3. イベントの方針。～自分たちのイベントであるということ～
(10分) 13:25
4. 段取り・機材等に関して。…PA (含ミーティング日)・照明など
(5分) 13:30
5. 自己紹介…15バンド (順不同)
PUZZLE / The GIRLS / Bull's EYE / CLOVER / Vand /
ザ・珉珉 / Marked-Men / Liar / For Life / 卍-LOW /
GHOSTLATE / COOKIE84 / 発光ダイオード /
JERRY AND CRYBABIES / ヴァギストウータ
1分×13バンド (2バンド欠席) (15分) 13:45
>タイムラグ-5分 13:50

休憩

(10分) 14:00

6. 質問のコーナー
(20分) 14:20
7. 今後の予定・・・
週-1 or 10日に1回の間隔でミーティングを。
(5分) 14:25
8. 次回は8/7 (火) 16:30～を予定していますが…。
(5分) 14:30
9. 終わりの言葉
(1分) 14:30

ユースプラザ・KOB E・WEST 1周年記念ライブ

第2回 出演者ミーティング

今回は暑い中、集まって下さってありがとうございます。とうとうライブ・イベントへ動きだしました！みんなで力を合わせてボリュームのあるイベントを作り上げましょう！！

次第

スタート 15:30

1. あいさつ (青少年団体連絡協議会) (5分) 15:35

第1部

2. プロジェクト・イマジンからのお願い…
ちょっとしたスゲー！アンケート？ (15分) 15:55

第2部

3. アイス・ブレイク (20分)
みんなのことを知ろう！ 16:15
4. イベント企画担当分担…案出し (20分) 16:35
5. イベント企画担当分担…担当決め (20分) 16:55
6. 質問のコーナー (15分) 17:10
7. 次回のミーティングについて (10分)
担当 ごとのミーティング…
バンドごとのミーティング…PAに関して…8/20(月)の週に行います。 17:20
8. 終わりのあいさつ・第3部の説明 (5分) 17:25

第3部

フリー・ミーティング (フリー・ディスカッション) (無制限)
バンドメンバーにこだわらず、みんなで思いっきり話してください。何か案が生まれたら、伝えたいことがあれば、スタッフに気兼ねなく声をかけてください。

ユースプラザ・KOB E・WEST 1周年記念ライブ

第3回 出演者ミーティング

8月15日、今日は終戦記念日ですね。お盆の墓参りやら親類が集まる忙しい此の頃ですが、イベント本番まであと半月です。暑さに負けずに、夏休みの宿題共々やっつけて行きましょう。

次第

(15:30 ~ 17:30)

前回の議事から

- 各バンド毎にチラシを作る
- ホールのセッティングは各バンド代表者で行う
- パンフレットは各バンド代表者で作る
- 繰越事項 → ●各バンドの連絡先一覧の配布。(名簿のコピー配布)

本日のメニュー

パンフレット部隊

(ぼん吉・おかっち)

- 表紙・目次の作成
- パンフレットの構成(出演順も?)
- パンフレット製本の手順
 - 8/15 白紙配布
 - 8/21 バンド毎のチラシ回収
 - ? 表紙等を付けて製本
- タイムテーブルのページを作成?
 - 当日の時間の流れを把握(出演順を含む?)

※ 投票に関して

- 残念ながら賞品はお楽しみです…。
- 票の回収の仕方
 - パンフレットからの切り落とし?
 - 出口にティッシュの箱程度のものを15個設置する。

ホール装飾部隊

(もりやん・ちろ)

- 出演者用通路の設置
- ホール内のスタンディング及び座の構成
- 控え室以外のステージ横の控えの確保
 - 見取り図の作成
 - パネルの枚数確認
 - 装飾に必要なものの準備(ある程度の照明を含む)

※客足の確保を念頭に

- 時間のつなぎ方
- 映像
- テーブル・ホール内飲食等
- ホール後部(反ステージ側)の利用

次回案

- 出演順・PA 関連事項→8月21日(火) 15:30~?

司 会 表

記入日 年 月 日

バンド名 A 代表者名

<本番時間> : ~

(バンド名 B) と (バンド名 A) の間

担当バンド名 C

(司会時間 : ~ :)

※ 入れ替え時間として前後バンドの演奏時間を5分マイナスして記入。

希望内容 :

セットリスト表 PA 用

記入日 年 月 日

バンド名 代表者名

	曲 名	曲 調	コーラス	備 考
1				
2				
3				
4				
5				
6				
7				
8				

総演奏時間： 分

ユースプラザ KOBE・WEST 1周年記念イベント ライヴ

セツトリスト表 照 明 用

記入日 年 月 日

バンド名 代表者名

前A (8本): 白 白 白 白 赤 赤 赤 赤・・・スポット4箇所 (V左 右 D)

後B (6本): 赤 青 黄 (左半分) (右半分) 黄 青 赤・・・ステージ全体の配色

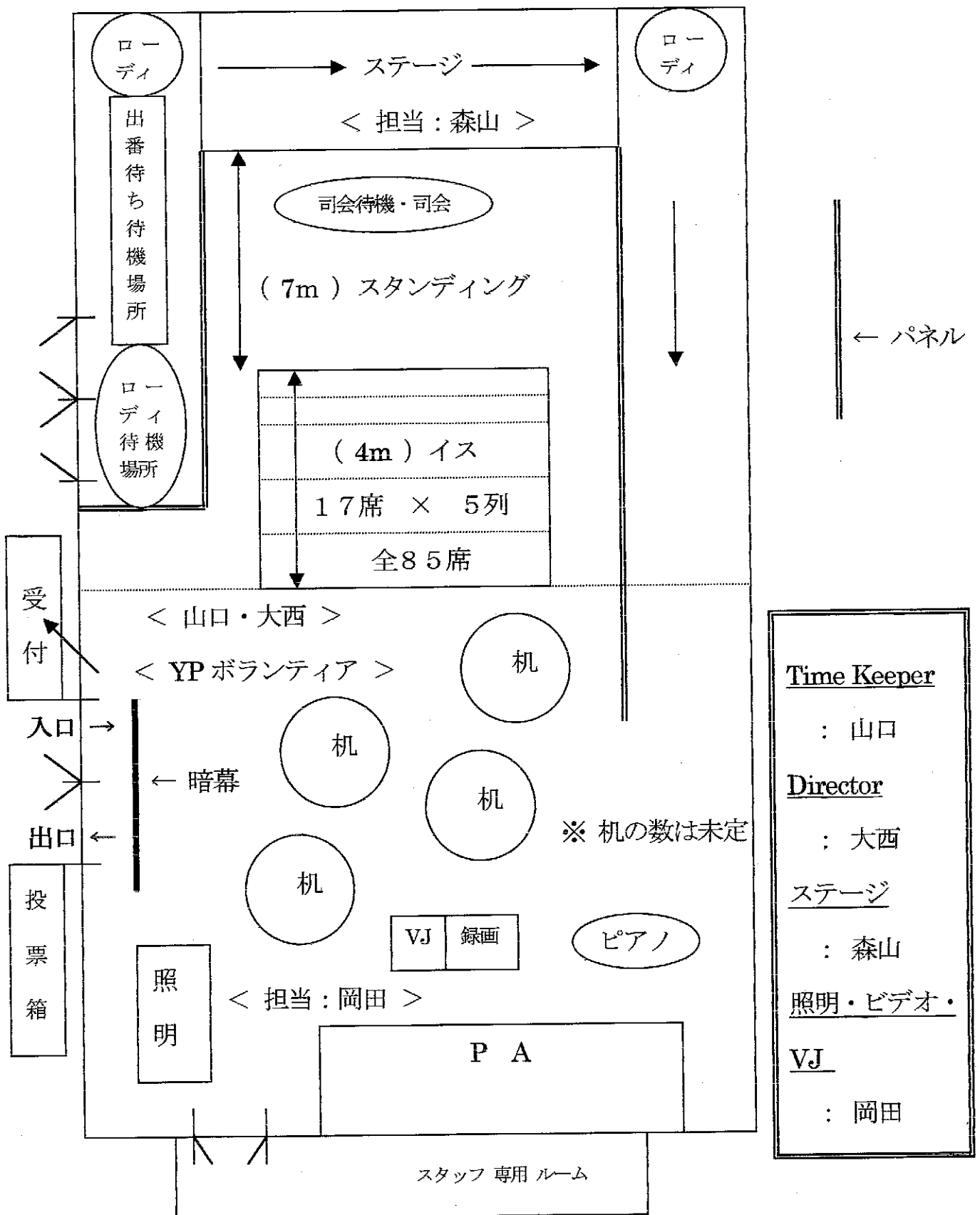
※ステージに向かって。※○を付けてください。

	曲 名	スポット (前)	ステージ (後)		備 考
			左	右	
1		D (白・赤) 左 (白・赤) 右 (白・赤) V (白・赤)	赤・青・黄	黄・青・赤	
2		D (白・赤) 左 (白・赤) 右 (白・赤) V (白・赤)	赤・青・黄	黄・青・赤	
3		D (白・赤) 左 (白・赤) 右 (白・赤) V (白・赤)	赤・青・黄	黄・青・赤	
4		D (白・赤) 左 (白・赤) 右 (白・赤) V (白・赤)	赤・青・黄	黄・青・赤	
5		D (白・赤) 左 (白・赤) 右 (白・赤) V (白・赤)	赤・青・黄	黄・青・赤	
6		D (白・赤) 左 (白・赤) 右 (白・赤) V (白・赤)	赤・青・黄	黄・青・赤	
7		D (白・赤) 左 (白・赤) 右 (白・赤) V (白・赤)	赤・青・黄	黄・青・赤	
8		D (白・赤) 左 (白・赤) 右 (白・赤) V (白・赤)	赤・青・黄	黄・青・赤	

9/9 バンド シフト (9/4改訂版)

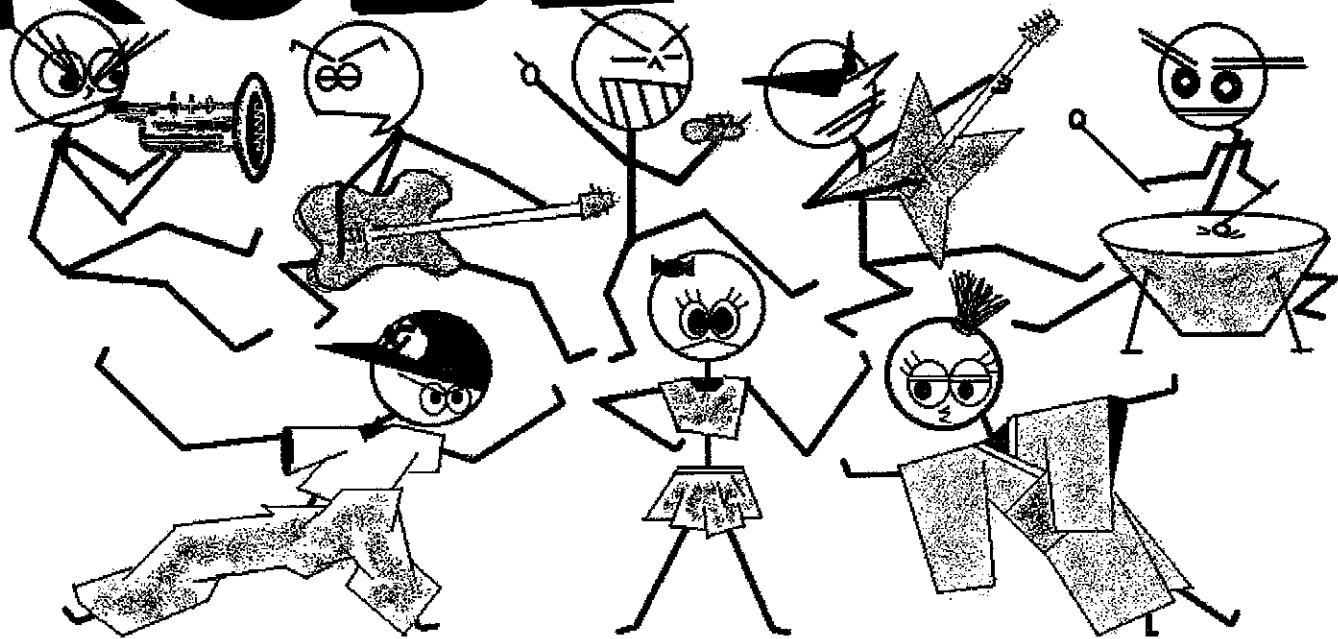
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13		
晴天	Vand	CLOVER	ヴァギストウーダー	GHOSTLATE	ザ・珉珉	For Life	Bull's EYE	Cookie 84	PUZZLE	Marked-Men	PL-LOW	THE GIRLS	JERRY AND	晴天	
8:30					裏入り	裏入り	裏入り				裏入り	裏入り	裏入り	8:30	
9:00			裏入り	裏入り		待機	照明リハ		裏入り	裏入り	リハ待機	リハ	リハ	9:00	
9:15				待機	照明リハ			裏入り		リハ待機	リハ			9:15	
9:30	裏入り	裏入り		待機	照明リハ				リハ待機	リハ				9:30	
9:45			待機	照明リハ					リハ待機					9:45	
10:00		待機	照明リハ					リハ待機	リハ				チラシ配り	10:00	
10:15	待機	照明リハ				リハ待機	リハ	リハ			チラシ配り		待機	10:15	
10:30	照明リハ	チラシ配り			リハ待機	リハ				チラシ配り		待機	照明リハ	10:30	
10:45	チラシ配り			リハ待機	リハ			チラシ配り		待機	照明リハ			10:45	
11:00				リハ待機	リハ			待機		照明リハ				11:00	
11:15		リハ待機	リハ				チラシ配り	待機	待機	照明リハ				11:15	
11:30		リハ		リハ		チラシ配り		待機	照明リハ					11:30	
11:45	リハ待機	リハ						待機						11:45	
12:00	リハ				チラシ配り			照明リハ						12:00	
12:15	↓			チラシ配り				↓						12:15	
12:30	↓		チラシ配り	チラシ配り				↓						12:30	
OPEN	袖で準備	準備		チラシ配り	チラシ配り			照明待機	司会準備		ロデ待機	ロデ待機		雨天	
13:00	演奏	袖で準備	準備		チラシ配り	受付	休憩	照明	司会・照明	司会準備	ロデ待機	ロデ待機	ロデ待機	13:00	
13:25	休憩	演奏	袖で準備	準備	準備	チラシ配り	受付	休憩	照明	司会・照明	司会準備	ロデ待機	ロデ待機	13:25	
13:50	ロデ待機	休憩	演奏	袖で準備	袖で準備	準備	チラシ配り	受付	休憩	照明	司会・照明	司会準備	ロデ待機	13:50	
14:15	ロデ待機	ロデ待機	休憩	演奏	演奏	準備	準備	準備	準備	準備	休憩	休憩	司会準備	14:15	
14:40	司会準備	ロデ待機	ロデ待機	ロデ待機	ロデ待機	ロデ待機	ロデ待機	準備	準備	準備	休憩	照明	司会・照明	14:40	
15:05	司会・照明	司会・照明	司会・照明	司会・照明	ロデ待機	ロデ待機	ロデ待機	準備	準備	準備	受付	休憩	照明	15:05	
15:30	照明	照明	司会・照明	司会・照明	ロデ待機	ロデ待機	ロデ待機	準備	準備	準備	チラシ配り	受付	休憩	15:30	
15:55	休憩	休憩	司会・照明	司会・照明	ロデ待機	ロデ待機	ロデ待機	準備	準備	準備	チラシ配り	受付	受付	15:55	
16:20	受付	休憩	照明	司会・照明	ロデ待機	ロデ待機	ロデ待機	準備	準備	準備	準備	準備	チラシ配り	16:20	
16:45	チラシ配り	受付	休憩	照明	司会・照明	司会・照明	ロデ待機	準備	準備	準備	準備	準備		16:45	
17:10		チラシ配り	受付	休憩	照明	司会・照明	ロデ待機	準備	準備	準備	準備	準備	準備	17:10	
17:35				受付	休憩	照明	司会・照明	準備	準備	準備	準備	準備	準備	17:35	
18:00			チラシ配り	受付	受付	照明	照明	司会準備	ロデ待機	ロデ待機	休憩	休憩	演奏	18:00	
18:25								司会		ロデ待機				18:25	
18:40														18:40	
19:00														19:00	
投票結果発表															
CLOSE															
撤収															
完全撤収															
20:00	もりやん・ぼん吉	おかつち(おかだ)	ぼん吉(ぼんさん=おおにし)	郁ちゃん(やまぐち)	もりやん(もりやま)										20:00
担当	ホール:もりやま / 音響:◎もりやま・おおにし / 照明・映像・記録:おかだ / チラシ:◎おかだ・おおにし / 運営:◎もりやま・出演バンド														
	管理・Time Keeper: やまぐち / 受付・案内・警備: ◎YPボランティア / 進行・運営補・統括補: ◎おおにし・KG助っ人ゼミっ子 / ※(◎=責任者)														
	担当														

9月9日 ホール 設営図



社会福祉・医療事業(子育て支援基金)助成事業

ユースプラザ KOBEBEST



1周年記念イベント

2001年9月8日(土)・9日(日)

@ 「パティオホール」

8日(土) 10:00~18:00

9日(日) 10:00~18:00

※ 午前中は出演バンドのリハーサル。

- 近隣中学校吹奏楽部演奏
- 熊森協会 講演会
- Let's Dance Dance Dance

Hip-Hop, Jazz, 日本舞踊 などのダンス発表

- Live Summer 2001

バンド・ライブ! & 観客の皆さんからの投票によるライブ show~栄冠は誰の手に?

- プロ歌手 in ユープラ ♪

〒654-0154 神戸市須磨区中落合2丁目2番7号 神戸市市営地下鉄「名谷駅」下車 徒歩すぐ
須磨パティオ「健康館」3F Tel & Fax 078-794-6868

ユースプラザ KOBEBEST

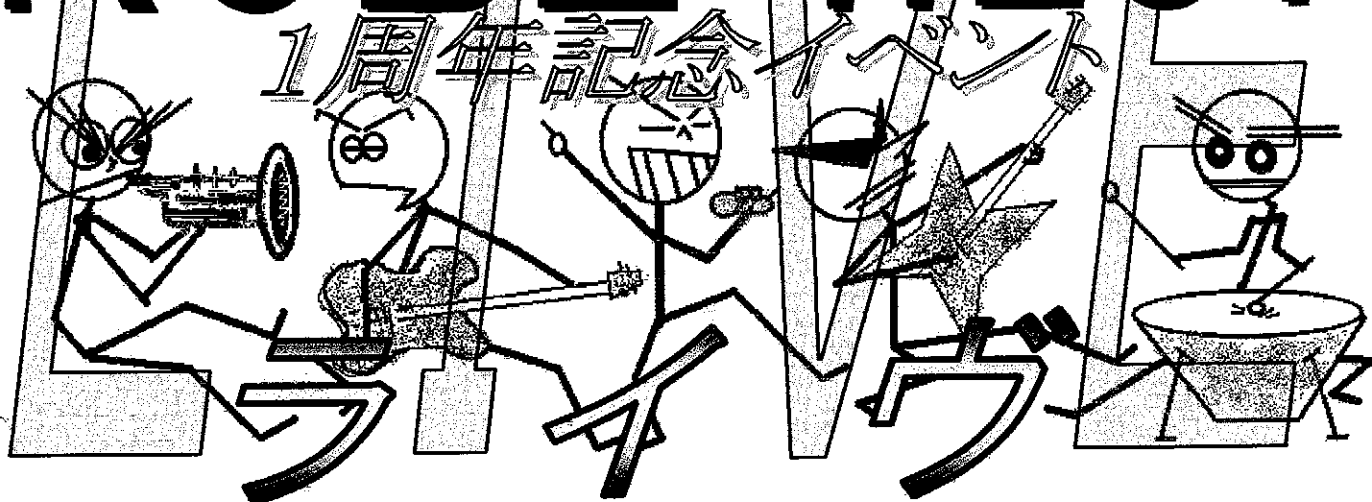
〔主催〕神戸市青少年団体連絡協議会・ユースプラザKOBEBEST「1周年記念実行委員会」

〔協力〕神戸市市民局生活文化部青少年課, 関西学院大学社会学部立木研究室プロジェクト・イマジン班
ユースプラザ ボランティア, (株)神戸ニュータウン開発センター

社会福祉・医療事業(子育て支援基金)助成事業

KOBE WEST

1周年記念



2001年 9月 9日(日) パティオホール

13:00 スタート (12:30 開場)

<雨天 14:00 スタート>

14組のバンドが
ライブイベント
やります!

須磨パティオ「健康館」3F
パティオ ホール

熱い
1票に
ホールが
燃える
!

投票結果の
発表は、
18:30 頃!

【主催】ユースプラザKOB E・WEST (SRK 神戸市青少年団体連絡協議会)

【協力】神戸市市民局生活文化部青少年課・関西学院大学社会学部立木研究室プロジェクト・イマジン班・(株)神戸ニュータウン開発センター

〒654-0154 神戸市須磨区中落合2丁目2番7号 神戸市市営地下鉄「名谷駅」下車 徒歩すぐ
須磨パティオ「健康館」3F Tel & Fax 078-794-6868

ユースプラザ KOB E・WEST

ユースプラザ KOBE・WEST 1周年記念イベント ～ ライヴ・イベント 9月9日 (日)

出演者 及び 関係者 ふりかえりシート

ここに記載いただいた感想等は、次回のライヴ・イベントに反映させるためのものです。

ご協力をよろしくお願いいたします。

※ ユープラ受付カウンターへご返却ください。

※ 未回収分は9/9 ライヴ・イベント出演者・関係者による

『打ち上げ & 次回イベントへの決起集会』(仮称/開催日未定)の際に回収いたします。

氏名 (バンド名):

()

記入日: 2001年 月 日 曜日

①イベントを終えての全体の感想をお書きください。

②イベント全体に関して、良かった点をお書きください。

③イベント全体に関して、悪かった点をお書きください。

④出演・運営・準備・撤収等の立場での感想をお書きください。

⑤聴く・観る側に立っての感想をお書きください。

⑥次回のライヴ・イベントに活かしたい案等が御座いましたらお書きください。

⑦その他、何でもお書きください。(絵も可)

Special thanks
to

Tsuji-san , Inoue-san ,
SRK-no-minasan
&

Youth Culture Markets 02-
Staff